
全ての道はローマに通ず

中二病 番号 20000

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ての道はローマに通ず

【Nコード】

N8218T

【作者名】

中二病 番号 20000

【あらすじ】

『織斑一夏 世界初の男性IS操縦者』

世界的に広められたこのニュースは常識を覆すものだった。

そして、世界で唯一ISが使える男子が登場したことにより、ひとつの派閥が動き始めた・・・

簪とのタッグマッチを終えた一夏たち、平和なひと時を過ごしてい

たら、新たな転校生が・・・

序章

4月下旬 イタリア ローマ 裏路地

『織斑一夏 世界初の男性IS操縦者』

世界的に広められたこのニュースは常識を覆すものだった。

そして、世界で唯一ISが使える男子が登場したことにより、ひとつの派閥が動き始めた・・・

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

暗くなったローマの裏路地、猫一匹通らない不気味な道で必死に走る二つの影、背後には軍服を着た男たちが追いかけていた。

「（糞ッ！一体どういうことだッ！）」

今年で16になる双子の妹がISの適正試験で、Sランクを取った帰り道。

ご褒美とばかりに高級料理店で食事を取り、二人仲良く帰路に着こうとしたはずなのに・・・

「ねえ！ちよつと・・・待って！待つ・・・ゲホッ・・・ゲホッッ！」

「おい！大丈夫か？チッ、追いつかれた！」

3時間も逃げ回った拳句、とうとう二人の兄妹が拘束された。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！助けて！！いや！いやあああああ
あ！！！」

「アルダ！糞ツてめえら、アルダに何しやがる！」

必死の抵抗が続けるが、大男3人がかりでは意味を成さなかった。
しかし、あきらめていない男の方に白髪交じりの男性が一人歩いて
きた。

「君たちには、我らがローマのために動いてもらっ。」

「だからってアルダには関係ない！妹を放せ！！」

「フフフフ・・・君は馬鹿だね？彼女のIS適正ランクをいくらだ
と知っている？『S』だ。代表候補生レベルでも、稀な適正だ。
それにね？君も協力してもらはなければならないのだよ・・・」

「オレに？どついうことだ！」

「織斑一夏・・・名前くらいは聞いたことがあるはずだ・・・フフ
フフフ・・・クエハハハハハハハ！！！」

「・・・・・・・・糞ッ・・・・・・・・ア・・・・・・・・ル・・・・・・・・ダ・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・」

「フフフフ・・・ついには、気を失ったか・・・まあいい、こ
の二人を施設に回せ。」

「ハッ、『全ての道はローマに通ず』」

「フフフフ・・・クエハハハハ・・・『全ての道はローマに通ず』
・・・か、道路だけとは思わないでほしいものだな・・・」

10月中旬 日本 IS学園

簪とのタッグマッチを終え・無人機の襲撃を退けた俺は、暫しの平和な日常を過ごしている。

今は、布団すふいんの中でのうたた寝を過ごしている。

・・・はずだった。

スパーン

軽く現実逃避をしていた俺に、容赦なく千冬姉の出席簿しゅっせいぼアタックが飛んでくる。

「織斑。聞いているのか？」

「聞いてません。」

嘘を言っても仕方がない。

スパーン

千冬姉、愛の鞭が痛いよ。

さかのぼること 1時間前

「（・・・・・・よし、誰もいないな）」

隣の部屋の住人も含めた王様（女王様？）ゲームの命令により、簀は一夏の部屋に侵入することになった。
ちなみに、命令の内容は

『3番（簀）の人が、一夏君にエ。ゲーにありそうな展開のモーニングコールをして、ここにつれて来ること』

などという、無茶苦茶な内容だった。当然、本人は大反対だったが、他5人の『かまわん、やれ。』という視線に耐え切れず、しぶしぶやってきたというものだった。

出て行く直前にルームメイトから言われた言葉が頭の中でこだまする。

『。ロゲー風のモーニングコールがわからなかったら、とりあえず布団にもぐりこむか、布団を剥いで、できればズボンも剥いで馬乗りになつとけば？』

篠ノ之 簀にとって、あまりにも過酷な命令だ。

「（し・・・・しかし、馬乗りくらいなら・・・・）」

なぜか落ちていた（らしい）一夏の部屋の合鍵を使い、簀はそつとドアを開けた。

一方その頃、簀たちの部屋。

「箒ちゃん行っちゃったね。」
「だね。」

そこには、すべてと書かれた割り箸をもった乙女たちが、箒の恋路を応援していた。

「ほ……箒。」

「い……一夏。」

ベットで寝ている一夏に馬乗りになっている箒。

その頬は、ほんのりと赤く染まっていた。

ロマンチック（箒視点）なひと時が流れる中、箒が口を開いた。

「……一夏……お、おは……」

「……箒。」

「な……なんだ？」

「重い。」

「!？」

持ち合わせていた（何故？）木刀を俺のほうに振り下ろし・・・つて、危なッ！

「何をするんだ、箒！」

「そ、それはこっちの台詞だ。女子に向かって・・・重いなんて・・・お、男として失格だ！」

顔を真っ赤にして箒は木刀を振り回している。そして、

スパーン スパーン

千冬姉が箒と俺（巻き添え）に出席簿アタックを食らわせた。

「とにかく、織斑と篠ノ之はIS展開の上、5キロのダンベルを両手に持ちグラウンド10周だ。ぐずぐずするな！早くしろ！」

「・・・はい・・・」
「・・・」

優しい優しいお姉さまの愛の鞭だ。しっかり受け止めないとな。
・・・泣いてなんかないぞ。うん。

序章（後書き）

1章 1話に続く

（あとがきはそこで・・・）

一章 第一話 『転校生』（前書き）

では、本編をお楽しみください。

一章 第一話 『転校生』

「遅いぞ、織斑・篠ノ乃。」

死に物狂いで、グラウンドを走り終えた俺たちの前に、
仁王立ちの千冬姉がいた。

「ぜえ……………はあ……………む、無理言わないでください……………」
織斑先生……………」

お互いの肩を持ちながら、俺たちは席に座った。

「皆さん、おはようございます。今日は、転校生をご紹介します。
す。」

イタリアから来た ニネット Ⅱ ルツケーシ君と代表候補生の
アルダⅡルツケーシさんです。」

ずり下がる眼鏡を持ち上げながら、山田先生が転校生を呼んだ。

へー、転校生か……………」

……………え？ニネット Ⅱ ルツケーシ『君』？

ガラッ

上履きの音を立てながら教壇に登った転校生は、どうみても180
cmはある。大男と一人の少女だった。

以前、シャルが転校していたときは、女子の黄色い声援が聞こえて

きたが・・・

シーーーーーー

SHRがここまで静かなのは入学以来初めてだ。

「・・・・・・・・・・あー、オレ喋ってもいいですか？先生。」

「え？あ、は、はい！ど、どうぞ。」

どもりまくりの山田先生を尻目にニネットは自己紹介を始めた。

「あー、えー、転校生のニネットだ。呼び方は・・・・・・・・何でも良いや。趣味はピザ作り。そこにいるアルダのISの整備及び本人の看護を担当する。」

基本的にこいつに付ききりになるが・・・・・・・・まあ、暇なときは呼んでくれ。量産型・専用機問わず整備も出来るし、力仕事ならまかせろ。まあ、後2年間とチョイよろしく。」

「アルダⅡルツケーシは重い喘息持ちでな。兄のニネットによる付ききりの看護と、整備士として腕は確かなので特別に在学を許可した。」

「えっと、質問ありますかー？」

眼鏡をずり上げた山田先生がクラスメイトを見回す。
すると、一人の生徒が眠たそうに手を上げた。

「はーい、しつもんです。」

やっぱりのほほんさんだった。

「二ネット君のあだ名は〴〵『ニット君』でいいですか？」

・・・こんな質問、生まれてはじめて聞いたぞ。

「『ニット君』か・・・それでいいや。」

二ネットもあつさりと許可してるし。

そうしているうちに、クラスの後ろから『婦女子会談』が始まった

「ぼそぼそ（やっぱり、一夏君が受けかしら？いいえ、二ネット君が一夏君に責められるつてのでもいいわよねー。」

「ぼそぼそ（ひょっとして、そっちの子もシャルロットちゃんのと
きとは逆で女の子の格好をした男の子つてことも・・・）」

「ぼそぼそ（女装シヨタに責められる二ネット君と一夏君・・・あ
ー、もう最高！）」

「ぼそぼそ（今すぐ二人の人間関係を洗って！明日までに！出来な
いんじゃない！出来なくてもするのよ！You can do it！）」

なにやら、とてつもなく恐ろしい会話が聞こえてきた気がするが、
気のせいだろう。きっとそうに違いない。

「あー、それでこつちが・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

.....
」

「・・・おい、アルダー？」

ニネットが、アルダの肩に手を置いたその瞬間、アルダの体が飛び跳ねた。

「うひゃあ！ な、なに！？ い、いきなり話しかけないでよ！！」

「いや、だって今、お前が自己紹介する番だし。」

「え・・・あ、ああ、そうよね！ わ、わ、わ、わ・・・私は！」

「アルダさん？ 慌てなくていいですから。リラックスしてくださいね？」

「は、はい！ スーハー・・・スーハー・・・わ、私は、アルダ＝ルツケーシでしゅ！」

『しゅ』？

「あ、あわわ・・・ちょ、ちょっと噛みました・・・と、とにかく、よろしくお願いします！・・・って、キャア！」

アルダが、勢いよく頭を下げた拍子に、バランスをくずし・・・って、こっち来る！

「ちょ、ちよつと！ ど、どいて！ 織斑君！」

「どいてっ たって、どうやって・・・うわ!」

チュッ

「「「「「あ「「「「「」

この学園生活での、俺のセカンドキスは、名前しか知らない少女によって奪われた。

そして、今、俺にやるべきことが三つできた。

一つ、

「だ、大丈夫か？」

「あ、は、はい。大丈夫です・・・」

『相手の無事を確認する』

二つ

「と、とにかく降りて、教卓のほうに・・・出来れば織斑先生の後ろに・・・」

「うん・・・」

『相手を安全なところに避難させる』

三つ

「さて・・・っと」

『振り返る』

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「一夏さん？初対面のレディーに対して、いきなりキスというものは駄がなっていない証拠ですわ・・・！礼儀作法とは何たるかをマンツーマンで教えてさし上げますわね・・・！」

「一夏・・・それはひどいよ・・・一夏には、一対一でお仕置きが必要だね・・・！」

「一夏、私の嫁としての自覚はあるのか！こうなったら個別で拷問にかけて貴様の腐った性根を矯正してやる！」

「一夏、あんた一体なにやってんのよ！馬鹿！間抜け！ちよつと体育館裏に来なさい！ハア？一人で来るに決まってるでしょ！」

「一夏！ここまでの外道だとは思っていないかったぞ！もう一度鍛えなおしてやる！一人で道場に来い！」

「一夏・・・・・・一人で・・・打鉄式式の整備に来て・・・
・・・大丈夫・・・・・・ちよつと・・・重い物・・・持つてもらっただけだから・・・！」

「一夏君？・・・ちよつと生徒会室に来てもらえないかしら・・・
・・・！当然、一人でね・・・！」

振り向いた先には、順にセシリア・シャル・ラウラ・鈴・箒・簪・楯無さんの合計7人の少女たちが、顔に血管を浮き上がらせていた。ちなみに全員『ISを展開している』跡形もなく、殺すつもり』の

方程式が成り立っている。

「ま、待て！これは不可抗力だ！事故だ！事故！てか、鈴と簪、それに楯無さんは何でいるんだよ！

教室違っただろ！」

助けを求めんとばかりに俺は千冬姉の方を見る。影でアルダが顔を真っ赤にしていた。

「織斑……」

「ち、千冬姉……！」

俺の呼びかけに対して、優しく微笑む千冬姉の口から、死刑判決が下された。

「今から1時間、ISの使用を許可する。」

水溜りより浅い千冬姉の優しさに、ある意味、敬意を表します。

——その後、ほんとに一夏が死に掛けたのは、言うまでもない。

「で、あるからしてIS同士が3体以上の戦闘の際は……………」

教壇に立ち、黒スーツを着こなした織斑千冬が授業をしている。

「……………（織斑君に……………織斑君に……………織斑君に……………）」

新たに転校してきた少女は、顔を赤らめ授業などは上の空だった。

「……………！……………い！……………おい！聞いているのか、ルツケーシ！」

突如声をかけた千冬にアルダは口から心臓が飛び出そうになる。

「はひっ！お、織斑くん？！」

スパーン

「馬鹿者、織斑先生と呼べ。……………ルツケーシ。」

「は、はい！」

千冬の厳しい声にアルダのからだが硬直する。

「この授業が終わったら、織斑と、ニネット＝ルツケーシを呼んで来い。」

「はい。わかりました。」

「それでは授業を再開する。」

「……（織斑君……織斑君……織斑君……）

」

相変わらず授業は上の空だった。

「し、死ぬ……」

専用機持ちの猛攻を何とか避けきり、一時間後、俺は医務室のベツトでぶっ倒れていた。

ベツトに横になっているうちに一人の影が医務室に入って来た。

「よっ。災難だったな。」

ニネットだった。のほほんさんにつけられたあだ名のせいか、もうすでに頭に女物のニット帽がかぶされていた。

「セシリアたちは？」

「1時間を越えても、IS起動中のままお前を探索していたから、罰としてグラウンドを走っているよ。ここから見えるはずだ。」

部屋の窓に目を向けると、箒が青い顔をしながら走っていた。

「まあ、あれだ。アルダは極度の上がり症なんだ。今でも顔真っ赤にしてお前の名前ばかりつぶやいてやがる。」

「・・・ところで、アルダは重い喘息なんだよな？それなのにISなんて動かせるのか？」

「ああ、発作さえ出なければな。オレがここにいるのは、万が一って時のためだ。」

「でも、ISって結構体力を使うし、自分の妹なんだから少しくらい心配したっていいじゃないか、代表候補生って事だから国家に所属しているのはわかるけど、さすがに無理をさせてまで——」

「——『好奇心は猫をも殺す』って言葉、知ってるか？」

「え？」

突然の声色の変化に、俺は戸惑う。ニネットの鳶色の眼の奥に確かな殺意を感じた。

「もう一度言う、『好奇心は猫をも殺す』・・・さて、そろそろ休み時間も終わるな。戻るぜ。」

「あ、ああ・・・」

「どうした？腹でも痛いのか？」

「いや、大丈夫だ。」

いつもの調子に戻った、ニネットを見て、一夏は少し安心した。

「（『好奇心は猫をも殺す』・・・か。）」

・ 一夏は、どうしてもあの殺意のこもった眼が忘れられなかった・・・

一章 第一話 『転校生』（後書き）

投稿完了！

別のところでやっていた作品も含めればこの作品は2本目ということになります。

どこか文がおかしなところもありますが・・・そのときはどんどん批判していただいて結構です。

では、次の創作意欲が沸く頃にノシ

一章 第二話 『ウィリディタース・イヴ』（前書き）

初戦闘。はたして勝つのはどちらか？

一章 第二話 『ウィリディタース・イヴ』

「午後の授業はIS同士の模擬戦を行う！専用機持ちは準備をしろ、まずはオルコットとルツケーシ、アリーナを中心へ向かえ！」

二人の代表候補生がアリーナの中心で向かい合う。セシリアの胸の奥では嫉妬の炎が燃え滾っていた。

「あがり症で壁に激突しないようにお気をつけくださいませ。」

「ふーん、あなたこそ、織斑君に良いところ見せようと調子に乗って足元を払われないようにね。」

軽い挑発をかましあい、二人はISを起動した。

「ブルー・ティアーズ！」

「ウィリディタース・イヴ！」

アルダのからだからだが白い光に包まれる。

彼女のISは、『EVE』^{じよせい}という名のイメージには程遠い、がつしりとした肩と腰の装甲に、比較的細めな腕、ウィングスラスターを2機のつけた背中、

唯一、足には動きやすそうな継ぎ目一つない曲線的な装甲が展開されており、深緑を基調とした機体カラーだ。

両手にはロシア製の最新装備『罪と罰（Devil and Angel）』という、それぞれ黒と白のショットガンが握られていた。黒い方から散弾7発が、白い方からスラッグ弾7発

をフルオートで撃てるという代物だ。リロードに多少時間がかかる

とはいえ、慣れさえすれば10秒ほどで完了する。

「始め！」

千冬姉の掛け声とともに試合が始まった。

「なあ、一夏。」

ニネットが話しかけてきた。別にISを操縦するわけでもないのに、制服のまま授業に臨んでいる。

「なんだ？」

「セシリアってのは、どんな戦い方をするんだ？」

「戦い方・・・そうだな。いつも、射撃戦ばかりやってるから、近距離戦は苦手だと思うぞ。ブレードの方も呼び出しに時間がかかるらしいし。」

「なるほどね・・・よく分かった。近距離戦が苦手なんだな。」

「ああ。」

そして、ニネットは、口元を上げてニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

さっきに仕掛けたのはセシリアだった。ビットを全て展開させ射出

する。二つのミサイルと縦横無尽に動き回る4本のレーザーのコンビネーションは、とても厄介なものである。

しかし、この世に弱点がないものなど存在しない。セシリアがビットを操作している間は、自分自身が無防備になってしまふのだ。

「あまり派手だと嫌われるわよ？」

涼しい顔を浮かべながら、2つのミサイルを散弾で打ち落とし、セシリアに向かってスラッグ弾を4発打ち込んだ。

「・・・っ！」

ビットの制御をあきらめ、スターライトmk?に切り替える。

緊急回避を行い、避けたところに、さらに3発のスラッグ弾が打ち込まれる。

すれすれのところでそれを回避した、セシリアはリロードをしているアルダの隙を見逃しはしなかった。

距離を離しながら、スターライトのレーザーを打ち込む。2メートル、3メートル、4メートル、5メートルにさしかかろうとしたとき、足を止め、再びビットを展開した。

もう一度、レーザーを撃ち込む機会をさぐっている。

「あまい！」

足を止めたところを瞬時加速で詰め寄り、その勢いでセシリアを蹴り飛ばした。

「（瞬時加速!?!いつの間に溜めたんですの?）」

「そらそらそらそら！蜂の巣になるわよ！」

流れるような動きで散弾を撃ち込みながら、『罰』のリロードを行っている。

距離を離そうとしても、それを上回る速度で距離を詰めていく。

セシリアは、不本意ながらも近距離戦を強いられてしまった。

「すげえ……セシリアの弱点を的確に突いていつてる……」

「セシリアの『ブルー・ティアーズ』にとって、アルダの『ウィリディタース・イヴ』の相性は最悪だからな。ティアーズは中距離射撃型。こっちは高機動近距離射撃型だ。

溜めなしの瞬間加速つてのは、世界初なんじゃないか？イタリアが国をあげて創ったもんだぜ。

……普通のやつのは3倍エネルギー使うのは、どうかと思うけどな。おまけに、パワー型のノウハウももらってるから格闘だってお手の物。重いもんだって、軽がると持ち上げるからな。『近距離上等』ってやつだぜ。

……ただ、仕方ないっちゃ仕方ないんだが……如何せん、防御力と燃費がなあ……最悪なんだよな……」

「たしかに、動きがだんだん鈍っていつてるな。」

「そっついうこつた。」

優勢を保っていた、アルダもエネルギーや燃費の関係でだんだん押され始めてきた。

軽々しく避けていたレーザーにも、徐々に当たり始め、アルダに焦りの表情が浮かぶ。

「ハア・・・そろそろ、終わらせるわよ。」

両腕を前に突き出し、意識を集中した。

「――起きなさい・・・！リベリオン！」

刹那、アルダの目の前に巨大な『塔』が出現した。全長6メートル、半径20センチ、先端にはモーニングスターを髣髴させるエネルギー体のとげが飛び出していた。

あまりにも巨大なそれは、もはや『メイス』というよりも『不恰好な塔』といった方がわかりやすい。

「なッ・・・！」

想定外のスケールに唖然としていたセリシアへ、容赦なくリベリオンが振り下ろされる。

しかし案の定、動きは遅くなり避けるのは、たやすいことだった。

「所詮、見た目だけですわね！次はこちらの番ですわ！」

ビットを2つ展開し、ミサイルを放つ。

その縫い目を沿うように、スターライトのレーザーを射出した。

「ふーん、その程度なの？」

リロードを終えた『罪と罰』によりミサイルを打ち落とす。
上空に飛び、レーザーをギリギリで避け、武器をリベリオンに持ち替えた。

「・・・っ！はあああああ！」

リベリオンを抱きかかえそのまま垂直に落ちていく、着地と同時にアリーナ全体が砂煙で包まれた。

「（砂煙がつ・・・一体今どこに・・・？）」

ハイパーセンサーを使い、煙に紛れたアルダを探す。

このほんの一瞬の隙でも、代表候補生同士の試合になると勝敗を決するものなのだ。

まさに一瞬。

死角からリベリオンの横なぎが直撃する。

たった一撃で、シールドバリアーを突破し、右半分の装甲は砕け散り、絶対防御が発動する。

むき出しになった右腕に、『罪と罰』の射撃を至近距離で食らうことになったブルー・ティーズは、シールドエネルギーが一瞬で底を尽きてしまった・・・。

「そこまで！模擬戦を終了する。」

アルダールツケシ・・・快勝

一章 第二話 『ウィリディタース・イヴ』（後書き）

最近、セシリアのかませっぷりがひどい気がするが、別にそんなことはなかったぜ！

はい、初の戦闘シーンの投稿です。

燃費に関してですが、実際のところ。

一夏>アルダ（ただし、差はそれほどでもない。時たまに一夏<アルダということもある。） という感じです。

今後戦闘シーンはこのような形で行っていきます。

はたして、ニネットは一体何を考えているのでしょうか？

次回にご期待ください。

では次の創作意欲が沸く頃にノシ。

一章 第三話 『ルームメイト』

今日一日の授業を終えた、俺は寮の自室でくつろいでいた。

コンコン

「っ……？はい。開いてますよ。」

また盾無さんの襲撃かと、一瞬警戒したがその声の主はニネットだった。

「夕飯食いに行こうぜ。」

のほほんさんの物だったらしい、ピンクのニット帽を頭にかぶり、上機嫌なニネットが手招きをしている。

よくみると、その巨体の後ろで耳まで真っ赤にしているアルダが隠れていた。

「こんばんわ、アルダ。今から食べに行くのか？」

「え？……は、はい！そ、そ、そうです！」

「わかった。仕度するから待っていてくれ。」

「はいよ。」

「しかし、アルダ。」

「・・・何よ。」

「お前、ほんとに一夏の前だと人変わるよな。そんなに今朝のこと気にしてんのか？」

「——！！うゝうるさい！！！」

ゲシッ

「痛でッ！ちよつとまって！さすがに弁慶の泣き所は蹴るな！」

「・・・ふん！自業自得よ。」

そうこうしているうちに、部屋から一夏が出てくる。

「それじゃあ、行こうか。」

「りょーかい。」

3人で、食堂に向かう一夏たち。その身に振ってくる不幸を一夏はまだ知らない。

食堂を後にした一夏たちの前には、顔に血管を浮かべた千冬姉が立っていた。

恐い。なんかよくわかんないけど、物凄く恐い。

「・・・・・・・・織斑。」

「・・・・・・・・ド、ドウシマシタカ？オリムラセンセイ。」

「今日から、二ネットと相部屋になる。」

「ハ、ハイ。ワカリマシタ。」

「それと、山田先生がバルサンをぶちまけた。即刻、私の部屋に雑巾を持参して来るように。」

「・・・・・・・・えっと、それは生徒にやらせることですか？」

「一夏、勘違いするな。これは姉としての『命令』だ。」

「千冬姉・・・俺ちよつと用事が・・・」

「『即刻』、私の部屋に雑巾を持参して来るように。」

「・・・・・・・・ハイ。」

たぶん俺はこの場で泣いていい。

1時間後

「やっと終わった・・・」

千冬姉の部屋を片付けた俺は、自室のドアに手をかける。千冬姉の通達どおり、そこには二ネットがくつろいでいた。

「おかえり、一夏。風呂に入るか？もう一度飯を食いに行くか？それとも・・・アルダを嫁にもらうか？」

バタンツ

あれ？デジャブ？以前、楯無さんのときも同じようなことがあった気が・・・

ガチャリ

「おかえり、一夏。アルダにするか？アルダにしる。アルダにしてくれ・・・な？」

「『な？』じゃねえよ！口あけて初めの台詞がそれかよ！」

「おいおい、ルームメイトに対する言葉か？それ。」

「うん。」

「ひでー奴。」

二ネットとの会話を適当に切り上げ、俺は風呂の仕度をする。

「そういえば、アルダは誰のルームメイトになったんだ？」

「ん？ああ、アルダは『のほっち』と同じ部屋になったぞ。」

「のほっち？」

「ああ、のほほんのあだ名。」

「いやいやいや、『のほほんさん』自体あだ名だから。本名 のほとけ 布仏 ほんね 本音だから。」

「いいだろう、世の中あだ名のあだ名ぐらいあっても。個人の自由だ。個人の自由。」

「それは、公共の福祉に反しない限りだからな。まあ、別に今回の反してないけど・・・」

「いいじゃねえか。第一、アルダとのほっち意外と気が合うらしいな。」

一方 のほほんさんの部屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・グゥ、グゥ・・・・」

「・・・なんで私のベットに潜り込むんですか？」

「うーん、気持ちいいから？」

「だからって・・・抱きつかないでください！って、ちょっと！どこ触ってんですか？！」

「胸？」

「何で疑問系なんですか！正真正銘、胸ですよ！だから、服の中に手を入れないで！」

「いいじゃんかゝ減るもんじゃないんだし。」

「減りますって！私の中のいろんなものが！っていうか、一体誰なのよー？私と布仏さんを一緒の部屋になるよう仕組んだのはー！」

結局次の日、アルダは目の下に隈を作って、学校に登校したとさめでたしめでたし。

一章 第四話 『二ネット＝ルッケーシ』

小鳥のさえずりと共に目を覚ます、というロマンチックなものに憧れているわけじゃない。

しかし、せめて目覚めるのならば目覚まし時計で起こしてほしい、美女のおはようのキスまでは望まないが・・・お願いだから美女の出席簿アタックで目を覚ますのはやめてほしい。
ちふゆねえ

「織斑、今の問題の解答を述べよ。」

秋独特の涼しさに誘われた俺は、千冬姉の授業を寝てしまうという大失態をおかした。

「ハイ・・・わかりません!!」

「今さっき、説明したはずだぞ?」

「寝てました!」

スパパパーン

「いてっ!」

「ウグッ!」

「あだっ!」

俺と列の後ろで爆睡中の二ネットとのほんさんに目にも留まらぬ速さ（比喻ではない）で出席簿アタックを食らわした千冬姉は、

何事も無かったかのように教卓に戻り授業を続けた。

イタリア人特有の高い鼻を机に強打した二ネットは涙目になりながら授業を受け、

のほほんさんもさすがにもう一度寝るといふことはしなかった・・・

「一夏・・・ちょっと整備室に来て・・・」

放課後、簪に呼び出された俺は、共に整備室へ向かうことになった。廊下を抜け整備室まであと少しというところで二ネットたちと出くわした。

「おう、一夏。お前も整備室か？」

「ああ・・・ところでお前たちは何をしているんだ？」

「・・・・・・・・・・大道芸？」

「大道芸なわけないでしょ！いいから離れて、布仏さん！」

「んふふふふ〜」

大道芸という発言に妙に納得してしまうほど二ネットたちは、おかしなことをやっていた。

まず二ネットが立っており、彼の首に巻きついているアルダ、さらに彼女の肩・・・いや、鈴よりはある程度の胸にしがみついているのほほんさんという

なんとも摩訶不思議なことになっている。

「と、とりあえずがんばって……アルダ。」

「え？う、うん。」

ズルッ

「キャアッ」

「ん~~~~」

「やめて！放して！こないでー！」

「~~~~~」

「もうイヤーーー！！！」

一夏の励まし（？）により照れて、手を滑らせたアルダは
二ネットから滑り落ち、相当抱き心地がいいのだろうか？のほほん
さんに抱きつかれたまま助けを求めている。

哀れ、アルダ＝ルツケーシ

一夏と二ネットは簪と共に整備室へ入っていった。

整備室に入った一夏たちは、打鉄式の前に並んだ。

「……こいつぁ、ミサイルポットか？マルチロックオンシステム
は入れてないようだが……」

「・・・分かるの？」

「こう見えても、『ウィリディタース・イヴ』は俺の自作だぜ？つて、君は知らないか・・・オレは、ISの装備とかスペック程度なら見ただけで分かるんだ。」

「あれ、お前が作ったのかよ！」

俺自身、一人でISを作った人間に心当たりはある。

そう、あの生徒会長の楯無さんだ。

おまけに、見ただけでスペックが分かるって？・・・こいつ、ひょっとして・・・整備士として天才なのか？

「ああ、待機状態はあいつの足につけたミサングだ。マルチロックオンぐらいなら時間さえあれば作れそうなものだが・・・」

「今・・・みんなで作ってるところ・・・」

「そうか、来たばかりの俺が口を挟むのも悪いし、そろそろアルダが戻ってくるはずだが・・・来た。」

「ぜえ・・・ゲホ・・・ゲホ・・・つ、疲れたー・・・もう来てないわよね・・・」

「おっす、のほっち。」

「おっす、ニット君。」

「って、うひゃあ！！い、いつのまにいたのよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・zzz。」

「いやいや、寝ないでよ!」

「なんだ、のほっちと仲いいじゃん。」

「・・・お兄ちゃんも同じ目にあってみれば?きっと私の気持ちがわかるわよ・・・」

恨めしそうな目つきで二ネットをにらんだアルダは、ついに力尽きてその場にへたり込んだ。
肩で息をしながらも未だに二ネットをにらみつけている。

「さて、来て早々悪いが・・・『イブ』を出してくれ。それと一夏のほづもな。」

二人のISを出し終え、二ネットはパソコンを片手にいじり始めた。

「ふむふむ・・・やはり最大の弱点は燃費か・・・にしても、イブに並んで燃費が悪いってのも珍しいな・・・
ワンオフ・アビリティーは零落白夜・・・お前の姉さんと同じだな・・・
あー、なるほど・・・んでもってコレがこうなつて・・・」

「あー、お兄ちゃんが自分の世界に入り込んだらあと3時間は話しかけても無駄よ。」

ねえ、食堂行きましよ。」

「いいけど、何で腕に抱きつくんだ?それにのほほんさんも・・・」

「い、いいじゃない。」

「そうだよ。」

「……………ずるい……………」

両手に花＋１の状態で、一夏たちはその場を後にした。

「……………行っただか……………」

完全に一夏たちが立ち去ったあと、ニネットは一人つぶやき立ち上がった。

彼の足は人気の無い整備室の裏に向かう。

周囲を一通り確認した後、通信機を取り出した。

「……………こちら、ニネット。爺さんにつないでくれ。」

「はい、かしこまりました。番号とキーワードをお願いします。」

「N1576 『全ての道はローマに通ず』」

「……………一致しました。あなたをニネット＝ルツケーシと認識します。少々お待ちください。」

「早くしてくれ。」

保留音声が流れている間、ニネットは再び周囲を確認する。

右手には、雪羅のデータが入ったUSBが握られていた。
それを通信機につないで送信モードをONにした。

保留音声が終わると共に、彼にとって聞くだけでも虫唾が走る声が通信機から発せられる。

「フフフフ・・・久しぶりだな・・・ニネット。」

「そうだな・・・糞ジジイ・・・!」

「クエハハハハ・・・相変わらずの減らず口だな・・・つらいか？友人を売る気持ちは・・・」

「・・・・・・・・」

「がんばりたまえ・・・愛しの妹を救うためにな・・・フフフフ
フフフ・・・クエハハハハハハハハハハ!!!!!!」

「・・・っ・・・データの送信を開始する。一応、打鉄式式のデータもあるがそっちは必要か？」

「いや、取るに足らん。ブルー・ティアーズのほうはどうだ？」

「あれは、俺の目測のみだ。正確なもんは難しいと考えてくれ、感づかれてもヤバイ。」

「そうか・・・可能ならば、紅椿のデータをとってきてくれ。第四世代は非常に興味深い。」

「わかった。通信を終了する。」

通信を終了し、整備室へ戻るニネット。

一夏に対して、アルダに対しての裏切りの悔しさに、ニネットは顔をゆがめた。

「アルダには普通の学園生活を約束したのに・・・糞ジジイが・・・
・・・！」

一章 第四話 『ニネット＝ルツケーシ』（後書き）

ご意見。ご感想をお待ちしております。

一章 第五話 『日記』（前書き）

閲覧注意

一章 第五話 『日記』

「ただいまー。って、二ネットの奴まだ帰ってないのか？3時間は戻ってこないって言ってたけどすごい集中力だな。」

同居人の不在に、ある意味感動を覚えながらベットに倒れこむ一夏。シャワーでも浴びようかと立ち上がったとき、偶然二ネットのバックパックにつまずいてしまった。

そして、もともとファスナーが壊れていたバックパックから、大量のファイルが飛び出した。

「いててて、ん？何だこれ？」

ファイルの中の日記帳らしきものが一夏の前で開かれていた。

4月27日

私たちは、イタリア軍の急進派に拉致された。

絶対に逃げ出してやる。

名前がアルダというだけで、勝手に研究者の連中から『A3549』と呼ばれるようになった。

お兄ちゃんとは一度も顔を合わせていない。早く会いたい、不安で仕方が無い。

「これは・・・一体？」

『好奇心は猫をも殺す』そんな言葉も忘れて、一夏は日記を読み出した。

4月29日

私は今日からISの訓練をすることになった。

教官のクラウドディア 〃 バルダツサーレさんはとても優しい。
何でこんなやつらと一緒にいるのかがまったく分からない。

今日は、IS関連の用語について学んだ。

5月6日

クラウドディア教官はイタリアの国家代表になるためにがんばっている。

きっと教官ならなれます。って言ったら頭をなでてくれた。
ちよっと嬉しかった。

5月10日

やっと、お兄ちゃんと会うことが出来た。

なんだか以前と比べてやつれてる気がする。きっと疲れてるからに
違いない。

今日は添い寝でもしてあげようかな（笑）

5月14日

お兄ちゃんがやつれてる理由が分かった。

あいつら、お兄ちゃんの体にナノマシンってのを入れているらしい。
許せない。絶対に許さない。

5月28日

誰でもいい、お兄ちゃんを助けて。

6月5日

今日、お兄ちゃんに襲われた。

もう誰が誰だか見分けがついてない。

睡眠薬で眠らされた今でも私の名前を呼び続けている。

ごめんね。私が発作を起こさなかったら、私が喘息じゃなかったら、私が生まれてこなかったら
こんなつらい思いもせずにすんだのに、
私が死んだらお兄ちゃんは助かるの？

生まれてきて ごめんね。

6月14日

お兄ちゃんに打ち込まれていたナノマシンは、
ISの装備とか、スペックが分かるようになるものって教官から聞いた。
もうその能力を習得したからこれ以上、ナノマシンは必要ないみたい。
少しだけ、気持ち became 楽になった。

6月18日

お兄ちゃんが、ついに才能と能力を発揮した。
私のためだけのIS。
「イブ」って名前。
深緑がとってもかっこいい。

6月24日

お兄ちゃんがとっても嬉しそうな顔してる。
理由を聞いたらついに、「アダム」が完成したみたい。
あれ？最初に神様に造られたのってアダムのほうだったような？

追記

さっきのことをお兄ちゃんに聞いたら、苦笑いしてた。
単なる勉強不足だって・・・

7月3日

今日は、教官と一緒に町に出かけた。もちろんお兄ちゃんも一緒に一緒にご飯を食べて、一緒に服を買った。とっても楽しかった！
また一緒に出かけたいな！！！！

7月5日

お兄ちゃんがラボのほうに連れて行かれた。
次は一体何をする気なの？

7月12日

今日もお兄ちゃんは帰ってこない。

7月30日

やっと、お兄ちゃんが帰ってきた。
お兄ちゃんは私の顔を見たとたん倒れこんで寝ちゃった。
よっぽど疲れてたんだろうな。

8月4日

教官が変わった。

クラウドディア教官と違ってとっても恐い。

8月10日

自分で言うのもなんだけど、私の操縦の腕は上がる一方だ。
これならクラウドディア教官もお兄ちゃんも褒めてくれるに違いない。
クラウドディア教官、どこに行っちゃったんだろう。

8月15日

クラウドディア教官が死んだ。

教官が変わったあの日から、ある作戦に出てみたいで
そこで戦死したそうだ。

もう、クラウディア教官はいない。

やっぱり、私に関わるとみんな不幸になるんだ。

私がいなかったら、クラウディア教官もイタリア代表になってたは
ずなのに、

死なずにすんだのに、

全部私が悪いんだ。

8月25日

今度は私が倒れた。

研究者からは極度のストレスだって言われた。
誰のせいだと思ってる。

追記

私が日記を書いた後、お兄ちゃんがお見舞いに来てくれた。
目を真っ赤にして、私が大丈夫だって分かったら
安心しての隣に座ってくれた。

もう寝ちゃったのかな？うん、座りながら寝ちゃってる。

こんな私のために必死になってくれてる。

早く元気にならないと。

8月28日

投与薬がまた変わった。以前の薬もだめだったしこれもきつと無理。

お兄ちゃん毎日私の看病をしてくれている。

あの鬼教官はこんな私を引っ張り出して訓練をさせる。

頭が痛い。もうどうにかなりそう。

いたい たすけて おにいちゃん

9月、日

もういや！ あたまがいたい！

きょうもあいつらはわたしのところにやってくる
たすけてよ！ たすけにきてよ！ おにいちゃん！

9月、4日

わたし ひとをころした

あいつらをころしてやったんだ

つれてかれる ころされるかも しれない

わたしが わたしじゃなくなる おにいちゃん

、月一日

みんな

な

しん

じゃえ

ころこ

す

わたしも

し

ん

じゃ

え

「!!!!・・・ページが血糊で開かない!」

最後のページは真っ赤に染まって、エグイ憎しみの言葉が書き綴られていた。

その日記はあまりにも衝撃的な内容だった。

二ネットの『好奇心は猫をも殺す』という言葉思い出した刹那、一夏の後頭部に鈍い痛みが走る。

「——好奇心は猫をも殺す・・・忘れたとは言わさねえぞ?」

一章 第五話 『日記』（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

一章 第六話 『過去編 知恵の実』

「——！！！」

気づいたときには、二ネットのパンチが一夏の鳩尾を捉えていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

激痛にひざが折れた一夏を、二ネットが無言で蹴りつけたる。

その巨体から繰り出される打撃は重く、

だんだんと意識が遠のいていく。

「二ネット・・・待ってくれ・・・悪気があったわけじゃ——」

「——黙れ。」

一夏の弁解も聞かず、一夏の首に手をかけた瞬間、騒ぎを聞きつけた山田先生が部屋のドアをたたく。

「い、一体何があったんですか?! 早く返事をしてください!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すみません。山田先生。ちょっとオレがバックパックを蹴飛ばしただけです。」

「・・・・・・・・分かりました。そろそろ消灯時間です。二人ともおやすみなさい。」

山田先生の気配が遠くなると同時に、二ネットは一夏を睨み付けた。

「さすがにもう一度騒ぎを起こすと、次は部屋のドアを叩き割つても入ってきそうだ・・・」

おまけに、どう考えても誤魔化せてないな・・・先生たちにはただの喧嘩ってことにしてもらおう。」

そういうと、ニネットは一夏に向き直り視線を落として話し出した。

「一夏・・・その顔だと、全て見たって感じたな・・・」

「ああ・・・見たさ・・・一体・・・過去に何があつたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「非常識なことをしたのは謝る。でも、聞きたいんだ。イタリアで、アルダとお前は何をされたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・おまえ、口は堅いほうか？」

「ああ・・・決して口外しない。約束する。」

「・・・・・・・・分かった。少し長くなるが聞いてくれるか？」

ニネットは、過去について話し出した。

4月27日

「くそっ！テメェら！放しやがれ！」

イタリア軍急進派のラボにつれてかれた二ネット。
試験管やフラスコだらけの部屋で、彼は椅子に座らされた。

「一体どうするつもりだ！アルダはどこにいる！」

噛み付くような口調で叫ぶ二ネットを白髪交じりの男が見下ろす。

「安心したまえ．．．彼女は別の部屋にいる．．．」

「．．．君たちを拉致した理由が分かるかね？」

「分かるわけねえだろ。自己紹介もなしに質問すんじゃない、糞ジジイ。」

「フフフフ．．．元気があって何よりだ．．．」

「．．．っ」

「私は．．．ロドリゴ」バルダッサーレ大佐だ．．．イタリア軍急進派 通称「知恵の実」のリーダーをしている．．．」

「そうかいそうかい。知恵の実だかなんだかしらねえが、それと俺たちに何の関係性がある？」

「それを．．．答える義理は無い．．．」

「ハア？．．．ふざけんじゃねえ！」

「ふざけてなどいない．．．大真面目だ．．．君は黙って私にしたがつていればいい．．．君の大切な妹．．．アルダといった

か・・・

彼女の命が惜しく無ければな・・・」

「糞共が・・・」

「フフフフ・・・クエハハハハハハハハハハ！！・・・おい、お前たち・・・早速作業を開始しろ・・・」

「ハッハッハッ」

ロドリーゴの命令と共に白衣を着た研究員たちは、二ネットに注射をした。

「イテッ・・・何しやがる！」

「君には、ある特殊な能力を身につけてもらうよ・・・君に注射したナノマシンによってね・・・」

ナノマシンが全身に回る、その想像を絶する激痛に意識を手放してしまった。

4月30日

「・・・アルダは・・・無事なのか？」

「無事だろうよ。幸か不幸かアルダちゃんは、ランクSだからこんなところに幽閉されて、ランクSだからこんなところで生かされてるんだ。」

「・・・そうか・・・」

「ほれ、りんごだ。食うか？」

「・・・すまない・・・とてもじゃないが、食べる気にはならない。」

「・・・りょかい。」

「悪いな・・・ヴィセンテ・・・」

「気にすんな。」

ニネットの自室で親しげに話しかけているのはヴィセンテ Ⅱ デンツァという研究員だ。

ニネットと一番歳が近く、何よりその憎めないキャラクター性が彼の心を許すきっかけとなったのであろう。

「アルダちゃんはいま、クラウドディアの訓練を受けているぜ。」

「クラウドディアつつたらあの糞ジジイの娘か？」

「正解。まあ、性格は大違いだけどな。あの爺さんの娘がどうしてあんな女神ちゃんになったのか、急進派の七不思議だ。ありゃきつと母親似だぜ。」

「ハハ、違いねえ。・・・ところで、そのことをアルダは知ってるのか？」

「当然、知らないだろうよ。・・・ここだけの話、おれたち研究員

もわざと大佐とコンタクトを取らないようにしてるんだ。

親衛隊の連中は知らねーけどよ、あいつら・・・まるでロボットみてーで話してて気持ちが悪い。」

「そんなことばかり言ってるから、いつまでたっても給料安いんだぜ。」

「うるせえ。別に贅沢しようとか、偉くなってぶんぞり返ろうなんてこれっぽっちも思っていないんだ。

おれは可愛い女の子・・・そうだな、クラウドみたいな女の子と結婚できればそれでいいんだよ。」

「ほう・・・お似合いだぜ。」

「冗談言つなよー、照れるぜ。」

「ああ、冗談だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・泣いてない。泣いてないぞ。」

「誰のせいかわからねえけど、涙拭けよ。」

「お前のせいだよ!」

5月6日

「アルダちゃん、ずいぶんクラウドに懐いてるじゃないか。」

「らしいな、俺も会ってみたが・・・確かにいい人だ。彼女だったらアルダを預けても問題ないだろう。」

「お！ついに来たか？お兄ちゃん発言。」

「・・・なんだそりゃ。」

「・・・・・・ところでお前、最近寝てないだろ。目の隈がくつきりと浮かんでるぜ。」

「・・・いつまでたっても、ナノマシンの注射には慣れないな。」

「あんなもん、慣れちまったほうがやばいって。なんだったら鎮痛剤でも出そうか？」

「毎度毎度、世話になる。」

「大丈夫だつて、急進派に天使ちゃんがやってきたんだ、せめてもお礼だよ。」

「・・・天使ちゃん？」

「アルダちゃんのことだよ。あの天真爛漫な笑顔、キュッと締まった口元、それでもって口元のほくろが、なんと言つか・・・色っぽさを醸し出してマニアックだよな」

クラウディアもいいと思っただけ、なんだったらおれ、アルダちゃんに転向しようか—— おぶぱッ！・・・な、殴るほどの事じゃねーだろ！」

「……テメエ……その台詞をよりもよって本人の兄貴の前で言うか……お前みたいな男にうちの妹はやらん！」

「そこを何とか、お父さん！」

「お父さんじゃねえ！！つかなんで、日本の昼ドラみたいな展開になってるんだ……」

5月11日

頬についたキス跡を気にしながら自室のベットで横になっているニネットに、クラウドディアとヴィセンテが訪れた。

「久しぶりね、ニネット。感動の再開の感想は？」

「すばらしかったよ。添い寝にキスまでしてもらった。」

「よかったじゃねーか、16歳の美少女に添い寝してもらえるなんて、俺らの中じゃ、お前ぐらいしか出来ねーよ。」

そんな他愛も無い話をしている最中に、研究員の一人が駆けてきた。

「ニネット!! ルツケーシ。今日からナノマシンの量を増やす。早くラボに来るんだ。」

「……………はいよ。」

黙って研究員についていくニネットを急いでヴィセンテが止めた。

「ちょっと待て、これ以上ナノマシンを増やすって? やめろ、こい

つを廃人にする気か？」

「この研究において、あなたの権限は無い。」

「ふざけるな。ナノマシンの量が増えたら、確かに能力の習得は早い。だがそこまでする必要は無いだろ。」

第一、いまだって規定の2倍の量を注入してるんだ。習得より二ネツトが壊れるのが先だ。」

「この研究において、あなたの権限は無い。」

「ふざけんな！いい加減に——！！」

ヴィセンテが研究員に掴みかかった時、後ろにいた警備員がヴィセントに銃口を向けた。

「……………分かったよ。だが絶対にこいつに無理をさせるな……………いや、今ですら無理をしてるんだ。そのことを考えて研究に移れ。」

「それは、命令か？」

「いや、忠告だ」

「……………了解しました。デンスア中尉……………行くぞ。」

「……………ああ……………」

ニネットは悲しげな表情でラボに向かっていった。

一章 第六話 『過去編 知恵の実』（後書き）

過去編は、4部構成程度で行こうと思います。

一章 第七話 『過去編 土砂降りの雨』（前書き）

気分が落ち込んでいる方は、閲覧をお勧めしません。

一章 第七話 『過去編 土砂降りの雨』

ナノマシンを注入されるたびに、ニネットは自分の何かが狂い始めるのを悟った。

連中は何のために自分に能力を植え付けるのか、それが分からない。フラスコから取り出される液体を飲まされ、激痛を伴うナノマシン注射。

ラボにいる間は、生きてる心地がしなかった。

ただ、それでもいいと彼は思った。それでアルダが無事ならば・・・

小さい頃から、二人は仲がよかった。

双子というのも会ったのだろう、両親共に不在でも何一つ不自由なかった。

一緒に笑って、一緒に泣いて、喧嘩もした。

ニネットにとって、アルダが可愛くて可愛くて仕方が無かった。

だから、いい。自分の苦痛でアルダが無事だったら・・・別にかまわない・・・

5月14日

「今日は昨日教えたISが使えないとき・・・つまり生身のときの戦闘の実践をするわ。」

「はい！」

アルダの心地よい返事と共に両者はゴム製の警棒を構える。

二人とも相手の動きから一瞬たりとも目を離さない。

両手、軸足、フットワーク、呼吸のタイミング・・・

先に仕掛けたのはアルダだった。

足のばねを利用し、すぐさまクラウディアの懐に入り込む、そのまま勢いに任せ警棒を振りかざしたとき、アルダは猛烈なタックルを食らった。

しかし、すぐさまクラウディアの袖を掴み耐えようとするが、足を払われアルダは床に突っ伏した。

よく見ると、ひじを擦りむいたように血が出ている。

「あ、大丈夫？アルダ。」

「ええ、大丈夫です。痛たたた・・・」

「とりあえず雑菌が入るのも嫌だし、医務室・・・というか、私の部屋に行くわよ。」

「はい。」

「N1576の調子はどうだ？」

軍服に身を包み、帽子を深くかぶった中年の男がコンピューターのグラフを見る。

「はい、問題ありません。命令通りナノマシン量を規定の5倍にしましたが、効果は期待できないでしょう。」

白衣の研究員が、終始無表情で男に説明をする。この実験に関わっ

ている研究員は、皆感情を捨てまさにロボットのようだった。
気持ち悪い、とでも言いたげに男は目をそむける。

「効き目無しか・・・かまわん、この量を一週間続ける。」

「了解いたしました。」

淡々と作業を続ける研究員を尻目に、男はラボを出た。

ラボへと続く廊下の壁に、ヴィセンテが寄りかかっていた。

「お前がここに来るのは久しぶりだな、ヴィセンテ」デンツァ中尉。
「

「・・・あいつのナノマシン実験が始まってから、ここに来るのは
今日が初めてだ。」

「知恵の実トップレベルの研究員でありながら、何故今回の実験に
参加しなかった？」

「決まってるだろ？おれが納得できなかったからさ。」

「またそんな馬鹿げたことを・・・つまり、納得したからここに来
たって事か？」

「いや、もっと納得できなくなったからここに来た。——量を増
やすように命令したのはあんたか？」

「そうだ。もともとの目的は妹の方だろう？言わば奴はおまけ、死
のうが壊れようがかまわない。」

「ふざけんな!!」

薄ら笑いを浮かべる男にヴィセンテは掴みかかる。

激震するヴィセンテとは裏腹に男は虫歯だらけの歯を出して笑っている。

「文句を言うのなら・・・今度、バルダッサーレ大佐にでも掛け合ってみたらどうだ？」

「・・・・・・・・・・っ!」

「そら、そろそろN1576が出てくる。肩でも貸してやったらどうだ。」

終始、薄ら笑いを浮かべながら、男は自室に戻っていった。

視線をラボの入り口に戻すとニネットが出てきた・・・いや、引きずり出されてきた。

「お、おい!大丈夫か!？」

死んだような表情のニネットを肩に担ぐ。
もう、呼吸も心臓も止まっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「しっかりしてくれよ!おい!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ちくしょう！」

ニネットを担ぎ上げたヴィセンテが、クラウドディアの部屋に向かって全力疾走する。

彼女の部屋は自室兼医務室となっている。

医師の免許を持っている彼女は、何か役に立てればと初め自室に応急処置の道具を備えていたら、

その美貌ゆえか本来の医務室には誰も入らなくなり、仕方なく彼女の部屋が医務室になってしまった。

ただし、今彼女はアルダと訓練中のはずだ。

部屋に彼女がいるかは、分らないが・・・いることを願うしかない。

クラウドディアの部屋の前に着くと人の気配がした。

運よく、クラウドディアは戻ってきていたのだ。

「クラウドディア！ニネットが！」

部屋のドアを開ける。そこには絆創膏を手にしたクラウドディアと・

・

「お、おにい・・・ちゃん？」

——このふざけた事態は何だ。一体何なんだ・・・なんでアルダちゃんがいるんだよ・・・ふざけてんじゃねえぞ！

「お兄ちゃん！」

アルダがニネットのそばに駆け寄る。

血の気が引いたその顔は、見ていなくても痛々しかった。
最悪のタイミングだ・・・こんなだったら、まだいないほうがマシだった。

「お兄ちゃん！ねえ！何があつたの！おにいちゃん！」

涙をこぼしながら叫ぶアルダをなだめ、ニネットをベットに寝かせた。

「クラウドディア・・・今から心臓マッサージと人工呼吸を行う。」

「了解・・・アルダは外に行つてなさい。」

「でも、おにいちゃんが！」

「いいから、早く！！！」

クラウドディアがアルダを部屋から引つ張り出す。彼女の頬にも涙が流れていた。

「いや！おにいちゃん！おにいちゃん！おにいちゃん！」

涙声になりながらも叫ぶアルダを、ヴィセンテは直視できなかった。
・・・

2時間後――

何とか一命を取り留めた二ネットを安静にして、クラウドディアはアルダの元へ向かう。

二ネットの自室ベットで涙を流す彼女は、クラウドディアが部屋に入ると共に顔を上げた。

「あ．．．教官．．．」

クラウドディアを見つけたアルダは、目を赤く泣きはらした顔で精一杯の作り笑いをする。

「．．．無理はしないでいいわ．．．」

「．．．はい。」

そういつて、クラウドディアはアルダの横に腰掛ける。

一つ溜息をつくと共にクラウドディアは語り出した。

「二ネットのことだけど．．．」

「．．．はい。」

「彼は、大佐．．．いいえ、お父さんの命令でナノマシンを注入されてるの。」

クラウドディアの『お父さん』という言葉にアルダの顔が強張る。

「え．．．クラウドディア教官．．．『お父さん』って．．．」

「まだ、言ってなかったわね．．．お父さんの名前は『ロドリーゴ

『バルダツサーレ』正真正銘、私の父親よ。」

「・・・・・・・・・・」

「・・・それでね、先に・・・謝っておくわ。ごめんなさい、私や
ヴィセンテの権限じゃお父さんは止められないわ・・・」

「そんな・・・じゃあ、お兄ちゃんはとうすればいいんですか？」

「・・・残念だけど、彼が耐えるしかないわ・・・」

「か、勝手な事を言いますけど・・・だ、だったらクラウド教官が頼み込めば・・・さすがにあの人も鬼じゃないはずです。実の娘の言うことだったら聞いてくれますよ。」

「いいえ、お父さんは鬼よ。イタリアの軍事力を世界一するなんて馬鹿げたこと言って・・・同僚だって、親友だって、妻だって平気で利用してきた人よ。」

実の娘が掛け合った程度で、そんなの焼け石に水だわ。それに、上層部も完全にお父さんのロボットよ。もうイタリア軍の7割は急進派と考えていいわ・・・」

「そんな・・・」

アルダは下唇を噛み、拳を握る。肩を震わせて、唇からは血がにじみ出ていた。

「許せない・・・絶対に許さない・・・!」

5月27日

「N1576はまだ使い物にならないのか！」

急進派の会議室で響くロドリゴの怒号。

小さく縮こまつてる研究員たちは、ただ一言も喋ることなく嵐が過ぎ去るのを待つ。

反論なんて出来やしない、反論する者が出たなら次の瞬間、脳髓が吹き飛ばされているだろう。

「いいか！本人の負担など気にするな！ナノマシンの量を増やし続ける！」

「……………了解いたしました。」

5月28日

降りしきる土砂降りの雨。

アルダは、二ネットが戻ってくるまでお気に入りの人形を抱きかかえて待っていた。

この人形は、クラウディアやヴィセンテがせめてもの慰めということで買ってくれたものだ。

人形の顔は、アルダの気持ちなんて気にせず笑っていた。

最後に笑ったのっていつだっけ？そんな事を考えてるうちにドアが開く。

ドアを開ける音と共に疲れきった表情のヴィセンテと……

「あ……………おかえり……………お兄ちゃん……………」

「……………ウ……………ア……………ア……………」

ア・・・・・・・・・・・・・・・・」

14日のあの日以来、ニネットは廃人同然だった。

日に日に増えるナノマシンと劇薬の量。

麻痺した体は、時折つぶやく妹の名前以外、何も聞き取れなかった。研究員たちは、N1576は死んだも同然だ、と言う。

目一杯の作り笑顔、最近はずっかり作り笑顔がうまくなった。

ベットに座らされたニネットにアルダは目を合わせる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、あのさ。お兄ちゃん・・・私ね、今日クラウド教官に褒められたんだよ！

休憩時間に作ったケーキだって、ヴィセンテさんに美味しいって言ってもらえたんだ！

ねっ、ヴィセンテさん！」

「え・・・あ、ああ。うまかったぞ、アルダちゃんのケーキ・・・今度食わしてやるってさ。」

空元気。無駄な足掻き。そんな事ぐらいわかってる。でも、アルダが幸せそうに話するときニネットは決まって目を細める。

それだけでいい、それだけでまだニネットが死んでないことをアルダは信じれる。

「お兄ちゃんもさ、元気になったら一緒に食べよう！私それまでに腕を磨いておくからさ！

だから・・・ねえ・・・早く元気になってよ！早く笑ってよ！ねえ！早く！今からケーキ作るからさあ！

美味しいって言うてよ！お兄ちゃんが好きな物だってたくさん作ってあげるから！」

涙でぐしゃぐしゃになった顔で、アルダは二ネットの首を絞める。

「！・・・おい！やめろ！アルダちゃん！」

アルダの後ろからヴィセンテが羽交い絞めにする。

けれども、疲れきったヴィセンテの羽交い絞めは弱々しいものだった。

羽交い絞めを振りほどいたアルダは、ついには二ネットを殴りつける。

無抵抗でベットに沈んだ二ネットの胸倉を掴む。

「なんで、何もしないの！私、今お兄ちゃんを殴ったんだよ？お兄ちゃんを殺そうとしたんだよ？」

抵抗してよ！怒ってよ！もう嫌！私、もう死にたい！もう死なせてよ！」

叫びながら泣き続けるアルダをヴィセンテがひっぱたく。

「ふざけんな！女の子が死にたいなんて言うんじゃない！・・・アルダちゃん、二ネットはこっちで預かる。だから今日はもう休もう。な？」

落ち着きを取り戻したアルダは、ヴィセンテに頭を下げ、「おやすみ」といつて、ヴィセンテは部屋を出た。

「・・・お前がすっかりしねえとアルダちゃんの可愛い顔が台無しじゃねえか・・・おれはアルダちゃんの兄貴にはなれねえんだよ。」

頼むぜ．．．親友．．．」
ニネット

——土砂降りの雨はまだやまない．．．

——たった一人、部屋に残された少女はただ助けを求め続けた。

——誰か．．．

——だれか．．．

——だれかおにいちゃんをたすけてよ

一章 第八話 『息抜き 女王様ゲーム!!!』 (前書き)

注釈 この話は、作者が鬱展開を書きすぎて、作者や読者の皆様の精神衛生のために、かなりはちゃけた内容です。

今後のストーリーにはほとんど関係ないので。

鬱展開が続いても構わない方、雰囲気壊したくない方はこの話は無視して構いません。

自分自身「これはwwひどいwww」と思いながら書きなぐったものなので、

ハッキリ言って「カオス」この一言で説明できます。

『わたしは一向にかまわんツッ!』
という方のみお読みくださいノシ

一章 第八話 『息抜き 女王様ゲーム!!!』

時は現代にもどり 簾の部屋

「セーの……」

「女王様ゲーム!!!」

パチパチパチパチ

「さあさあ、始めました。IS学園伝統（大嘘）毎年恒例（もちろん嘘）女王様ゲーム！」

今回のゲストは……簾ちゃん アルダちゃんのお二人です。」

ワーワー キヤーキヤー

——私だ。簾ノ之 簾だ。この閑話を見る前に言っておくッ！

私は今いわゆる「カオス」というのをほんのちよっぴりどころではなく思いつきり体験している。

い……いや……体験しているというよりは思いつきり理解の範疇を超えているが……

あ……ありのまま 今 起こっていることを話すぞ！

『私は自分のベットで気持ちよく寝ていると

思ったら、いつのまにかゲームに参加していた』

な……何を言ってるか わからないと思うが

私も何をされたかわからない……

頭がどうにかなりそうだ・・・というか、今なってる。

ISとか好奇心とか

そんなチャチなもんじゃ 断じてない

もつと恐ろしいIS学園の片鱗を味わっている・・・

そんな、グロッキーな私などほったらかしで、既に私の部屋でゲームが始まっていた。

ブラックサンダーにコカ・コーラ、コアラのマーチや三矢サイダー。色とりどりのお菓子や炭酸飲料が所狭しと机の上に広がっている。首謀者たちにより割り箸は配られ、みんな自分の番号を確認している。

私の番号は・・・うつ・・・「3」か・・・以前もこんなことがあったような気がするぞ・・・

「さてと・・・女王様だ〜れだ!」

「はい!」

私のとなりが手を上げる。

3が来ませんように・・・3が来ませんように・・・

「・・・じゃあねー、3番の人が好きな人の名前を言う!」

・・・・・・は?

「は、はああああああ!」

私の素っ頓狂な声にみんなが私のほうを向く．．．
こ、こっちを見るな！

ジ

「い、いや……えつとその……」

ジ
ー

ジ
ー

「わ．．．私が．．．す．．．す．．．好きな．．．」
「ゴニョゴニョ」

ジ
ジ
ジ

ええい、もう！だからこつちを見ないでくれ！

「えつと……その……」

は、恥ずかしさで死にそうだ！だ、誰かー！
私がまごまごしているうちに、誰かが口を開く。

「篠ノ乃が好きなのは、一夏君だよね！」

ツ
ツ
ツ
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!

な、ななななななななななな。何故そのことを……じゃなくて、何を根拠にそんな事を！

「だって、見りゃわかるわよ。ねえ？」

その発言に部屋の誰もがコクコクとうなずく。

ち、違う！……いや、違ふは無いけど……と、とにかく！私は
一夏のことなど……一夏のこと……一夏のこと……など・
・

プ、
プ
シュー
・
・
・

「あ、箒ちゃんが倒れた。」

私の頭は一夏でいっぱいになった・・・

パタン・・・キュー・・・

——篠ノ之 箒 行動不能（笑） 理由……一夏のことを想いすぎた。

ほ、ほうきさん！？ええつと、ほ、篝さんが倒れてしまったので次はこの私、アルダールツケーシが実況を続けていきたいと思います・
・
・
・
．．．なんでわたしこんな目にあってばかりなんだろう．．．き
やーたすけてーおにーちゃん

「じゃあ、もう一回仕切りなおそう！」

ああ、いつになったら抜け出せるんだろう・・・
ホワイトサンダー食べ放題って言葉に釣られた私が馬鹿だったー。

ジャラジャラジャラ

気を取り直して・・・番号は・・・6番か。

「女王様だーれだ？」

「・・・・・・・・わたし・・・・・・・・」

あ、いたんだ。簪ちゃん。

「さてさて、女王様。ご命令は？」

うう・・・早く終わらないかなー

「・・・・・・・・6番と・・・・・・・・2番が・・・・・・・・キス・・・・・・・・」

・・・・・・・・え？私ってやつぱいじられ役なの？

（はい、そうです。未来永劫変わりません（キリッ by 中二病）
そ、そんな~~~~~

っていうか、2番って誰？

「私だ〜6番の人誰〜？」

よ、よりにもよって・・・なんで布仏さんのよー！

「わ、私です。」

「そっか〜、じゃあやろうか。」

えっ?! いや私、心の準備が・・・

ざわ・・・ ざわ・・・

「アルちゃん。かくごと」

い、いや! 来ないで〜!

いやあああああ!

ズギユウウウン!

「「「さすがのほん! 私たちにはできない事を平然とやってのけるッ! そこにシビれる! あこがれるウ!」「」「」

な、なんでこうなるのー!ー!ー!

めでたしめでたし(笑)

一章 第九話 『過去編 幸せ』（前書き）

書いたッ 一章完！

一章 第九話 『過去編 幸せ』

6月8日

「先日、暴走したN1576についてですが・・・」

ロドリーゴの書斎では研究員どころか士官、そしてクラウディアを筆頭としたIS操縦者が集まっていた。

重たそうな椅子に腰を下ろしたロドリーゴは目をつむって報告を聞く。

「凡庸ISを初めとして、クラウディア中佐の「禁断の果实（フルッタ）プロイビッタ」も機能停止です。おそらくナノマシンによって電子ロックをかけられたかと・・・」

「・・・復旧作業は？」

「それが・・・彼に鎮静剤を打ったり、A3549のケアなどで今だ復旧作業には・・・」

黙って報告を聞いていたロドリーゴは立ち上がり、報告している研究員に拳銃を突きつける。

「・・・馬鹿者が・・・何故分担して作業を続けなかった！」

「しかし、大佐！N1576・・・いいえ、二ネット君の暴走に何人の犠牲が——」

研究員の頭に風穴が開くと同時にIS部隊から悲鳴が上がる。

けれども、ロドリーゴは気にすることなくIS部隊に銃口を向ける。悲鳴は一斉にしてやみ、書斎にはすすり泣く声が響く。

「……………口答えをするなど言っておろうが……………」

親衛隊が研究員の遺体を運び、ロドリーゴは再び椅子に座る。誰も顔を上げず、重い空気が流れる。

「とにかく、能力を手に入れたのは昨日耳にした。今すぐ奴に新しいISを作らせる。」

皆、黙って自分の持ち場に戻った。

6月14日

あの日のような土砂降りの雨、あまり乗り気ではない室内訓練を終えた後、

アルダはクラウディアや仲のいいIS部隊員と共に食事を取っていた。

何の他愛も無い世間話。もうアルダは誰にも気づかれないほど作り笑いがうまくなった。

食事を済ませ、いざ立ち上がろうとした瞬間。クラウディアが彼女に声をかける。

「……………ねえ、アルダ。この後ちょっと私の部屋に来てくれないかしら？」

他のみんなは自主練習で構わないわ。」

皆の返事を聞く前にクラウディアはアルダをつれて自室へ向かう。誰もいない暗い部屋でクラウディアは電気もつけず話し始めた。

「・・・この前の二ネットの暴走だけどね・・・」

「・・・はい。」

「・・・二ネットのナノマシンはISとかその他一般兵器のスペックが分かるものの。」

「・・・はい。」

このとき、クラウドディアは隠し事をした。

二ネットのナノマシンはそれだけでは無いことを、スペックだけではない、ナノマシンのハッキングによる電子ロックおよびその解除。

さらに、ISの適正をテスト無しで見破ること。それによって、リンクSのアルダが襲われたこと。

暴走し、ナノマシンから送られる情報のみが頼りだった二ネットには、リンクSは脅威の対象でしかなかった・・・

そのことを隠しながらクラウドディアは話を続ける。

「その能力は習得したから。もう二ネットは苦しまなくてすむわ。」

「わかりました。・・・ところで、お兄ちゃんは今どこに?」

「・・・秘密よ。」

含みをもったクラウドディアの言い方に、頭にはてなマークを浮かべながらアルダは自室に戻っていった。

「ふぁー……眠い……」

いつもの日記を書き終えたアルダは、ひとつ背伸びをした後、備え付けのベットに寝転んだ。

あのクラウドディアの発言が心に引かかる。

『……秘密よ。』……意味がわからなかった。場所を聞かれて「秘密」と答える。何かを隠すにはあからさま過ぎるし。

何かの予感がする。でも、それは悪い予感ではない。そこはかたない高揚感でみたされ、枕に顔をうずめる。

しばらくそうしていると、コンコンとノックが聞こえた。

「はい。開いてますよ。」

ドアが開けられ、その先にはニコニコ顔でヴィセンテとクラウドディアが立っていた。

ヴィセンテがおもむろにアルダに寄ると、顔を近づけ小声で

「今から、15秒……いや10秒目を閉じてくれ。」

言われるがままに目を閉じたアルダは車いすの車輪の音を聞く。

何者かが、アルダに歩み寄り——不意に、抱き寄せられた。

「——ただいま、アルダ。」

聞きなれた声。1ヶ月間、ずっと待ちわびた。

誰よりも頼りになる。かけがえのない兄、ニネットの声。

涙があふれ出た。泣くべきところではない、笑って「おかえり」と、

返さなければならぬのに、嬉しくて、本当に嬉しくて。嬉^{うれしな}涙が止まらなかった。

涙でぐしゃぐしゃになった顔で、アルダはニネットの体を抱き返す。

顔を上げると、クラウドディア達も笑いながら涙をこぼしていた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！お兄ちゃん！おにいちゃん！よかった・
・ほんとによかった。」

涙声になりながら兄との再会を喜ぶアルダを、なんだか照れくさくてヴィセンテは直視できなかった。

落ち着きを取り戻したアルダは、ヴィセンテ達に頭を下げ、「ありがとう」とふたりに告げると、二人は笑顔で部屋を出た。

「・・・見た？さっきのアルダの笑顔。」

「当たり前だ。あんな良い笑顔、一生のうちに1度、拝めるかどうかだぜ。」

「フフ・・・そうね。」

――土砂降りの雨はいま止んだ。

翌日、ニネットは医療等でリハビリを受けていた。
クラウディアの診断によると、1週間は毎日リハビリをするように命じられた。

「どう？妹さんの調子は。」

「昨日はしゃぎすぎて、俺が来たことを日記に書き足さずに寝ちまつたよ。」

「よかったわね。」

「あらためて礼を言う。ありがとう。」

「フフ・・・いいのよ。例ならヴィセンテのほうに言って。私は・・・お父さんの尻拭いをただけよ。
・・・さて、じゃあテキパキ行くわよ！」

「おい待て、ちょっとタンマ、って痛たたた！」

6月28日

「ヴィセンテ」デンツァ中尉。そして開発総責任者 ニネット「ルツケーシ」研究員。プレゼンを頼む。」

部屋のライトが消され、スクリーンにPCの画面が映る。
白衣を着て、マイクを持ったニネットが意気揚々とプレゼンを開始した。

「まずは、お手元の資料をご覧ください。

ご存じの通り、ウィリディタースシリーズは「禁断の果実（フルツァープロイビッタ）」の改良型です。

イブは『高機動近距離射撃型』。アダムは『耐久近距離特殊型』です。

まずは、ウィリディタース・イブ、以後V・E（Viriditas・Eve）と呼びますが。

V・Eはウイングスラスターを2機、背中に装着し、一見して繋ぎ目がなさそうな脚部ですが、この部分は金属だけではなく特殊な樹脂も使っています。

肩と腰の装甲は「果実」^{フルツァ}の装甲を流用。

武器は、ロシア製の「罪と罰（Devil and Angel）」及び、凡庸グレネード。

さらに、『リベリオン』というメイス型の武器も用意しました。なお、至近距離対策として格闘も可能にしました。

着目すべきところは、『知恵の実』とバルダッサーレ大佐の親族の会社『エデンの園』が総力を挙げて開発した・・・」

パツ、とスクリーンの画面が切り替わり、でかでかと

ラビット・イグニッション
『瞬時衝動』

と、映し出された。

ニネットは、これ見よがしに身を乗り出し力説する。

「本来！瞬時加速には慣性エネルギーを得るためにタイムロスが生まれた。

しかし！瞬時衝動ではそのプロセスを限界まで効率化。

さらに戦闘が開始直後からエネルギーを圧縮し続けることによって、タイムロスを完全に無くした！

ただし、欠点としては使用するエネルギーが通常の5倍になってしまい非常に効率が悪い。

その点は今後の研究で、せめて3倍までには落としたい。

・・・まあ、詳しいことは後々、ヴィセンテにでも聞いてください。」

プレゼン用の敬語をすっかり忘れ、思いっきり上官にタメ口をきいた二ネットにヴィセンテは眉間をもんだ。

我に返った二ネットは、大きな咳払いをして説明を再開する。

「次は、ウィリディタース・アダム、以後V・A（Viriditas・Adam）と呼びます。

V・AはV・Eとは対照的な機体です。また、クラウドニア中佐の専用機となるため

その前身の「果実」^{フルッタ}のパーツをそのまま使用しています。

詳しく説明していきますと、シールドバリアを二重に重ねることに成功。

これにより、余程のことがない限り、本人に攻撃が通ることはありません。

さらに、^{フレッド・イグニッション}瞬時加速の技術を応用し、極限までエネルギー効率を高くしました。

おもな武器としては、自立行動が可能なビット型の武器「オビデイエンス」

これで、遠近両方とも戦えるので必要ないとは思いますが、一応近接用ブレードも付けときました。

バススロットは空けてあるので、そのところは本人と相談をしてください。

以上でプレゼンを終わります。」

7月3日

「今日は買い物に付き合ってくれて、ありがと。お兄ちゃん。」

ローマの街並みで、アルダとニネット、そしてクラウドディアは買い物をしていた。

「久しぶりに街に出たからな。まずはうまいもんでも食いに行くか。」

「ええ、そうね・・・ところで、ヴィセンテがどこに行ったか知らない？」

周りをキョロキョロと見まわしながら、クラウドディアは尋ねた。いつもは堅苦しい軍服なのだが、今日は白いタンクトップと青いジーンズというラフな格好をしていた。

「ヴィセンテだったら、勝負服着てナンパをしに行ったぞ・・・ほら、あそこで2人引っかけて・・・」

突然、ぞくつとするような寒気が背筋を通り抜けた。隣を見ると、クラウドディアが顔に血管を浮かび上がらせ、殺意がみなぎっていた。

ニネットとアルダの二人は、気をつけの姿勢のまま身を硬直させ、

蛇に睨まれた蛙のようになっていた。（実際、睨まれているのはヴィセンテだが）

クラウディアの視線に気づいたヴィセンテが顔をひきつらせ、とてもなく綺麗な土下座をしてみせた。

殺意をふりまき、すれ違った通行人を怖がらせながら、ずかずかとヴィセンテのほうに迫る。

肩をいからせ、クラウディアは啞然としている女子二人の間に割って入り……

そして問答無用でヴィセンテの腹をけり飛ばした。

「あんたは……どうしてこうも女の子が好きなのかしらねえ？」

ナンパされた女子たちに一睨み聞かせ、二人はそそくさとその場を立ち去った。

「ご……ごめんな……さい。」

ごめんなさいと聞いたとたん、クラウディアはにつこりほほ笑み、ヴィセンテの顔に……

主人公の姉に勝るとも劣らぬ見事なアイアンクローを決めた。

「ぎゃあああああ……!!」

アルダは、自らの教官の鬼人っぷりに半泣きになりながら、兄とともに別れの敬礼を送った。

——とても美味しい食事を済ませ、新しい緑のワンピースを買って

もらった

——少女は、幸せだった

——知恵の実に拉致された時は、兄を除く何もかもが憎かった
——そこから、頼れる教官のクラウドディアに出会い　女好きで
お調子者なヴィセンテに出会った

——土砂降りの雨の日に、深い絶望を感じたけれど

——その雨はもうやんだ

——だから、今なら言える

彼女は、世間話をしている二人に振り向いて、話しかける

「・・・お兄ちゃん、クラウドディア教官。私ね・・・」

彼女は微笑む。作り笑いじゃない、心の底からの本当の微笑み。

「——私ね、今すっごく幸せ！！！」

そこから先は、とても短かった

オレとヴィセンテは新兵器の開発や、新型ISの研究に
こき使われ。

アルダと会うことは無くなった。日記にも書いてある通り、
たった一回だけ。

アルダが倒れた時だけだった。

クラウドディアが死んだかどうかは、俺には分からない。

だが、なんとなく直感が言ってる。クラウドディアは生きて
いる。

そんな気がしてならない。

狂ってしまったアルダに、俺ができたことは何もなかった。
あの時ほど、俺の非力さを呪ったことはない。

結局、俺たちが出した結論は・・・

——クラウドディアが亡くなった後のアルダの記憶の消去、
あいつは、あのことは忘れて、ただのIS学園の転校生と
して、
イタリア代表候補生として生きている。

このことを知っているのは、この中では俺と一夏、お前だ
けだ。

なあ、やってみないか？一夏。

——何を？

・・・ぶっ壊してやろつぜ。
知恵の実を・・・エデンの園ごとぶち壊してやろつぜ！

第一章完

一章 第九話 『過去編 幸せ』（後書き）

お待たせしました！

いやー、なんだかんだいって3話で終わりました。

ほんとのところ、もうちょっとグダグダになるかと思ったら、意外となんとかかりましたね。

次回から、第二章となります。

次はギャグだよ・・・ほんとだよ？

二章 第一話 『到来』（前書き）

イタリア語

・・・m i o a m a t o — 英語での「m y d a r l i n g
と考えればいいです。

二章 第一話 『到来』

翌日、朝。

ニネットの過去を聞いて、彼が知恵の実のスパイであったこと、それと昨日雪羅の情報を嘘を交えて送ってしまったことを聞いた。今日は、朝から清々しいくらいの快晴でニネットの顔つきも憑き物が落ちたようになってる。

「そつえば、ニネット。昨日、聞き忘れてたけどそのヴィセンテって人は今何やってんだ？」

制服に着替え、寮の玄関を出るとき、俺はニネットに気になっていたことを聞いた。

その質問に、ニネットは右手で顎を支える。

「さてな。俺がここに来る時は、ISの研究でラボに籠ってたからな、ひよつとしたら今頃本部でナンパでもしてるんじゃない——」

「君かわいいね。どのクラス？おれ、ヴィセンテ＝デンツァって言うんだけどさ。何号室？」

ヴィセンテ＝デンツァ？

ニネットの話だと、ヴィセンテって確かイタリアにいたはずなんじゃない？

ふと、ニネットの顔を見上げると血の気が引いて、開いた口がふさがっておらず。

理解不能、意味わかんねえ、という言葉で顔全体で表現していた。

「・・・すまん一夏。ちょっと待っててくれ。」

そういうと、かぶっていたピンクのニット帽を手に持ち、声がする方向に歩き始めた。

行く先には、イタリアンスーツを着こなした若い男が、あろうことが箒をナンパしていた。

無謀・・・というかアホだと言いたくない。

終始無表情のまま、二ネットは男の肩をツンと、突く。

「んあ？誰だよ、折角いいところだったのに・・・。」

「折角いいところだったのに？」

「・・・いいところだったのに、感動の再会ができるとは思わなかったよ、Mio amato。」

男は、ナンパや口説くときに使うような色気たっぷりなスマイルを見せた。

「HAHAHAHAHA」

乾いた笑いが響く中、二ネットは手に持っていたニット帽を相手の頭から首まですっぽり被せ、（劣化版顔だけスパイダーマンという例えがしっくりくる）

視界をふさぎ、肩を組むようにしてがっしりとホールドした。

「よし、ちょっとこっちで話を聞こうか。ええ？このナンパ野郎。あと一夏も来てくれ。」

二ネットに引っ張られるようにして、俺は玄関を出た。

男は二ネットによって市中引き回しの刑のように引きずられ、おそらく一張羅であろうスーツは、土や泥で台無しになっていた。

一人残された筈は、何が起きたのかまったく分からず（そりゃそうだ）ひとり首をかしげていた。

校舎裏の人気のない場所で、二ネットはさながらカツアゲしている不良のように、ヴィセンテに問い詰めた。

「どうして、てめえがここにいる？」

「今日付けでこのＩＳ理論の教師になったんだよ。．．い、いやいや、なんだよその目は！ほ、ほんとだからな！」

決してカワイコちゃんをナンパできるから入ったとかそんな理由じゃないからな！」

額に脂汗を掻きながら、ヴィセンテは口を開く。

ヴィセンテも、１８３ｃｍの二ネットと目の高さが変わらないほど、身長が高い。

もしこれがヴィセンテではなく俺だとしたら、絶対にカツアゲで通報されていただろう。

「じゃあどういう理由だ？俺にはそういう類の理由しか思いつかないんだが．．．」

胸倉をつかむ手に、どんどん力が入る。

高そうなスーツは、ワイシャツのボタンが取れ、ネクタイはよれよれ、極め付けには膝から下が泥だらけで少しかわいそうになっていた。

「あーあ、このスーツ新調押したばつかなのに・・・というか、お前、イチカ・オリムラとどういう関係？」

怪訝そうな顔で、ヴィセンテは俺を指差す。

初対面でも、顔と名前が知られているのは、彼が軍人だからだろうか？

「一夏には昨日、事情を話した。今のところ、俺とお前とそれから一夏、この3人だ。」

ヴィセンテからは、あのヘラヘラした笑みは消え、神妙な顔つきになっていた。

「ここに来た理由は二ネット、お前と同じだ。」

「あ？何だと？」

「生徒と教師の両方でスパイ活動をすれば、効率がいい。そう考えたんだろ。もっとも、あの大佐も馬鹿だよな。恐怖政治ですべてうまくいくと思ってやがる。こっちは裏切る気満々なのによオ。」

ニヒヒヒと、ヴィセンテは白い犬歯を見せて笑った。

「あと、アルダちゃんはこのクラスのどの席だ？」

「ちょっと待ってる。」

二ネットは自分のカバンを広げ、ファイルの中から転校初日に配られたと思われる座席票を取り出した。

「俺と同じ、1年1組。列は最後尾の俺の隣だ。IS理論の講師と聞いたが・・・担当はこのクラスだ?」

「基本的には、1年1・2組を担当している。だが、3・4時間目は2年生の整備科に行くからコンタクトを取るのは早朝か昼休み以降だろうな。」

ファイルをかバンにしまうと、ニネットはヴィセンテのスーツを見て、苦い顔をした。

「ところで・・・購買にスーツがあったと思うから、買ってくればどうだ?」

「お前のおごりで?」

一張羅のスーツが汚されたことに関してはそれなりに怒ってるようで、少し語尾が強かった。

そんな様子のヴィセンテに、ニネットはしれっと

「お前の金で。」

と言った。

イタリアンスーツをクリーニングに出し、購買で買ったスーツに着替えたヴィセンテが戻ってきた。

「はい、クリーニング代。」

交渉の結果。なんとかクリーニング代は払ってもらったという事になった。

HRの予鈴が鳴る5分前、俺と二ネット達は一緒に学校の廊下を歩いていた。

見慣れない、白人外人教師に近くにいた生徒が次々と振り返る。

1年1組のクラスのドアに手をかけた時。後ろから山田先生が声を掛けてきた。

「おはようございます。織斑君、ルツケーシ君。えっと・・・」

朝紹介される予定だったのか、山田先生はヴィセンテのことを知らなかったようで

名前がわからず、アタフタしている山田先生を見て。ヴィセンテの目が光る。

二ネットが、「やっぱりか・・・」とでも言いたげな表情で肩をすくめた。

「——美しい。」

「・・・へ？」

「綺麗な髪だ。そして、そのおしとやかな仕草、そのうつすら涙がにじんでる上目づかい。」

十分自慢してもいいほどのポテンシャルを持つてるにもかかわらずそれを自慢しない・・・！！

これぞ大和撫子・・・！素晴らし——」

スパーンッ

「生徒の前でナンパするとはいい度胸だな。21歳イタリア男。」

見事な出席簿アタックご苦労様です。千冬姉。

二章 第一話 『到来』（後書き）

第二章入りました。

二章 第二話 『ヴィセンテの授業』

「ハハ・・・どうも織斑先生。」

出席簿によつて殴られた頭をさすりながら、ヴィセンテは立ち上がった。

親しい間柄のイタリア人同士は頬にキスをするらしいが、命の危険を感じてか

普通に握手で済ましていた。

ため息をつきながら、千冬姉はヴィセンテを見据える。

その様子を見るに、たぶん千冬姉もナンパされたんだろうな・・・それも初対面で。

「あまり個人の趣味にとやかく言うつもりはないが、今は少なくとも職務中だ。」

「ナンパしたつて

いいじゃない

おれだもの ういせんて」

「どこの詩人だ、お前は。」

ちょうど、HR前の予鈴が鳴り、俺たちはそろつて教室に入つて行った。

いつも通り教室はざわついてたが、安っぽいスーツ（というか、リクルートスーツ）を着たヴィセンテを見ると、みんな、水を打っ

たように静まり返る。

生徒たちにナンパ用スマイルとともに一礼したヴィセンテが教卓の前に立つ。

イタリア人ってのは、人の集団に入ったら沈黙を強要させるフェロモンでも出してんのか？

「今日から、お前達にIS理論を教える。ヴィセンテ＝デンツァ先生だ。

イタリアから来た、元研究員でな。テンペスタ？の開発総責任者でもある。

くれぐれも、生徒たち『に』色目を使うんじゃないぞ。」

最後のほうは、完全にヴィセンテへの注意だろう。

「先ほど紹介にあずかりましたが、今日からIS理論の講師となりました。

ヴィセンテ＝デンツァと申します。よろしく願います。

僕は、イタリアにいた頃——」

「さて、HRを始めるぞ。いないものは手をあげるように。」

普通は無理だし、ギャグが一昔古いよ。これじゃまるで中年のおっさんだよ。（↑あんたが言うな）

「なあ、一夏と織斑先生って姉弟なんだよな？」

自己紹介を遮られ、少しぶーたれてたヴィセンテが、俺に耳打ちをしてきた。

「そうですよ。」

「そうか、じゃあ聞くが・・・織斑先生ってブラコ――」

おれたちの会話を横で聞いていたニネットが、ヴィセンテの足を千冬姉に気づかれぬよう踏みつける。

「痛え！教師に何しやがる！」

「うつせえぞ！木偶の坊！」

「何だと、このウドの大木！」

「調子に乗んなよ?!この、女たらし！」

「だまれ、このシスコン野郎！」

先ほどから、罵詈雑言を言い合っているが、内容に比べて声量は小さかった。

次々と、日本語で罵り合っていたが、ついに両者ネタが尽きたのか母国語でしゃべり始めた。

「donnaiolo!（女たらし!）」

「Pervertito!（変態野郎!）」

ついには、声を大にして罵り始めた。もう、何を言ってるのかわからん。

誰か翻訳頼む。なんか、千冬姉もあきらめてるし。

「・・・あーもう！」

そこに、自分の兄の痴態に堪えかねたアルダが、二人の前で腕を組みに王立ちした。
よくわからないが、恐ろしいオーラがアルダから漂ってる。

「Sei scemo? Stai zitto!（馬鹿じゃないの？黙ってなさいよ！）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何を言ったかはよく分からないが、二人がものすごい勢いでうなだれていた。・・・で、さっき何て言ったの？アルダ。

「そ、それじゃあ。授業を始めるぞ。カワイコちゃんは手を挙げて返事してくれ。」

あー、ほとんどいないけど。野郎はしなくていいからな。」

アルダに言われた言葉が余程辛かったのか、ヴィセンテの冗談（本人は本気）を溜息ひとつで聞き流した。

転校初日から思っていたが、こいつシスコンか？

「まあ、おふざけはこれくらいにして、今日は『イグニッション・プラン』^{こんち}についての講義をするぞ。」

今日、欧州だと統合防衛計画「イグニッション・プラン」の第3次期主力機を決定中だ。

今のところ参加しているのはイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、それにイタリアのテンペスタ？型。

さらに、偶然の産物と言つべきかわからんが、1組にはこれらの専用使いが全員いるな。

セシリア、ラウラ、アルダ・・・まあ、アルダのはテンペスタ？の発展形だな。

・・・ここだけの話、ちよつと前にテンペスタ？は、イタリア軍のなかで時代遅れ扱いされ始めたんだけどな。」

みんながカリカリとノートを取つてる中、ニネットとヴィセンテはガンを飛ばし合つていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（・・・なんか文句あんのか）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（てめーのせいだよ、てめーの）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（実質、テンペスタ？をちよつといじつだけの果実フルッタを使つたんだからしょうがねーだろうが）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（・・・・・・・・それを言われると何も言い返せねーな）」

アイコンタクトのみでコミュニケーションができてるのは、仲のいい証拠なのだろうか？

話を終わらせるように、ニネットはノートに、ヴィセンテは黒板に視線を戻した。

「さて、じゃあ教科書134ページを開いてくれ。昨今のISの開発は——！！？」

ヴィセンテが教室のドアへ目を向けた瞬間、ドアを蹴破るようになして・・・というか、実際に蹴破つて千冬姉が入ってきた。

「持ち物検査だ！全員そこを動くな。カバンをゆっくり机の上に出して、手を頭の後ろで組め！一ミリたりとも動くんじゃないぞ！」

ゴミ袋を持った千冬姉が出席番号1番の相川さんから、カバンの中を漁り始めた。

「・・・相川。I p o dを学校に持ち込むんじゃない。これは没収だ。」

「そ、そんなー」

俺が持っていたマンガ雑誌も没収され、千冬姉は着々と各席を侵略していく。

「学校に猛毒を持ちこむとは・・・誰かを殺すつもりか？オルコツト。」

「な、何を言ってるんですの？先生、これは手作りのお弁当ですよ。」

「・・・はあ・・・一度、お前は自分の料理を味見するがいい。」

「ど、どういう意味ですのー？」

自分の手料理の脅威をよくわかっていないセシリアを尻目に、千冬姉はラウラの前に立つ。

「教官！私は何もやましいものは持っていない！信じてほしい！」

「それは確かめてみればわかることだ。」

表情一つ変えず（……いや、あれは心の中で楽しんでるな）ラウラのカバンを漁る。

「ボーデヴィツヒ……これは何だ？」

「嫁のプロマイドです。」

自慢できるほど無い胸を自信満々にそらせ、はつきりと言う。

「嫁のプロマイドなどは、常に肌身離さず持っているものだ、クラリッサから教えられたのですが……」

「……黒ウサギ隊の今後が心配だ。」

その後、アルダの使い古しのぬいぐるみを没収し、さいごに、千冬姉は二ネットの前に立ちふさがる。

「カバンを確かめさせてもらうぞ。」

「いいぜ。俺は何も持ってきてないからな……って、ええ!!!」

二ネットのカバンの中から出てきたのは、自慢の可愛い可愛い妹の寝顔プロマイドだった。

「ほら教官！言った通りじゃないですか！嫁のプロマイドは持ち歩くもの——」「ボーデヴィツヒは黙ってる。」

「ま、ま、ま、待ってくれ！」

転校当時のアルダのようにあわてるニネットを見て、ヴィセンテが肩を震わせ笑いをこらえてる。

「ヴィセンテえええええエエエエエエ！てめえだな！こいつを入れたのは！」

「おう、そうだとも。」

朝のイタリアンスーツの仕返しとばかりに、しれっと言いつた。

「ふざけんじゃねえぞ、この野郎！（ありがとう、言い値で買おう！）」

・・・おい、シスコン。本音が漏れてるぞ。

二章 第二話 『ヴィセンテの授業』（後書き）

ご意見、ご感想、アドバイスをお待ちしております。

二章 第三話 『クラウドディアの記憶』

「あーあ、俺たちの私物が・・・全部千冬姉のごみ袋の中に・・・」

「猛毒だなんて・・・いくら教師だとしてもあんまりですわ!」

「お気に入りのぬいぐるみだったのにー」

「もう一度、諜報員に連絡を・・・次は寝顔で・・・」

突然、実施された持ち物検査によって俺たちの娯楽は失われた。

娯楽を失った俺たちは暴徒化し、ISを利用しての教師陣対1年1組との戦争が・・・

なんてこともなく、今のところ二ネットがヴィセンテを殴ろうとし、ブロマイドを譲るということで飼いならされた程度で済んでいる。

ふと、空を見上げると、すがすがしいくらいに晴れ渡っていた。

———そのとき、何かが高速で競技場に激突した。

爆音とともに、煙が上がり。放送のスピーカーからサイレンが鳴る。

『緊急事態。緊急事態。ただいま。IS競技場にISが侵入。』

一般学生は退避。専用機持ちと教員は即刻モニター室へ。

繰り返し、一般学生は退避。専用機持ちと教員は即刻モニター室

へ・・・』

「おれが、生徒たちを避難させる！お前たちは早くモニター室に行け！」

1年1組を後にして、俺たちはモニター室へ向かう。

つい先日も襲撃したばかりだというのに、一体あの人は何を考えているんだ！

モニター室のドアを開けると、神妙な面持ちの千冬姉がモニターをにらみ付けていた。

俺たちのことに気づいた千冬姉が、咳払いをして、俺たちのほうに向き直る。

「全員ISスーツを着用後、ここに集合しろ。出撃は私が許可なしにするんじゃないぞ！」

集められた代表候補生たちが背を向けた瞬間、モニターを見ていた教師が悲鳴を上げる。

モニターには、深緑の機体がゴーレム7体相手に大立ち回りを演じてる。

まるで中世の騎士のようなそれは、自分たちがあれだけ苦戦していたゴーレムたちを、まるで飛び回るハエをつぶすかの如く撃墜させていく。

一体のゴーレム？がブレードを前に突き出し、特攻を仕掛ける。

絶対防御を弱めるあの攻撃を、深緑の機体が正面から受け止める。

だが・・・操縦者が傷つくことはおるか、腹部を覆う装甲ですら全くダメージを負っていない。

そのままゴーレム？を両腕でつかみ、周囲を回っていたビットが高速でゴーレム？の頭から強引に突き破った。

ばらばらに砕け散ったゴーレム？のコアを深緑の機体は回収し、左手だけでゴーレムに向かって対戦車用と思われるライフルを連射す

る。

コアの部分だけを残して、精密にかつ大胆に打ち抜いていく。

「ゴーレムはともかくとして、あのIS・・・いったい何が目的だ・・・？」

モニターを眺めていた千冬姉が珍しく動揺している。

「まさか・・・ISコアの強奪かもしれないな・・・」

いつの間にか着ていたヴィセンテが額に汗をかきながら答える。

ヴィセンテは、開いている椅子にドカッと座り、モニターに映る映像から状況を分析していく。

自前のレポート用紙に、彼の右手がまるでタイプライターのように状況を書きとめていく。

それから5分、まだ俺たちは待機のまま。モニター越しにゴーレム解体ショーを眺めていた。

「織斑先生・・・出撃はどうします？」

山田先生が心配そうに千冬姉に尋ねる。

「出撃は・・・」

「出撃はやめとけ。無駄死にするだけだ。」

迷ってる千冬姉に、ヴィセンテはぴしゃりと言い放った。

その発言に、モニタールーム全員の視線がヴィセンテに集まる。

「俺自身、驚いてるが・・・あれは間違いない。イタリア軍のウイリディタース・アダムだ。操縦者は・・・」

「——クラウディア教官・・・ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルダの発言に、ニネット達は視線を低くして口を噤む。

——アルダは、クラウディアの戦死を知らない。

二人は、その原因の張本人だからだ。

「・・・いや、クラウディアじゃねえだろ。」

ぶつきらばうに、ヴィセンテはアルダに背を向けてモニターを見つめる。

「・・・とにかく、出撃させるのは三年のみにしろ。絶対に攻撃させるな、こつちからやんなきゃ襲い掛かつては来ないだろうよ。」

「な、何で私たちは待機なんですか？！あのISは無人機と戦った後ですわよ！一斉に襲い掛かれば・・・」

セシリアがヴィセンテに食って掛かる。ヴィセンテはそんな彼女を見下ろした。

「・・・お前が自信過剰って事は良くわかった。戦場じゃ、真っ先に死ぬのがお前みたいなタイプだ。」

「なっ・・・・・・・・！？」

言葉を詰まらせたセシリアは、そのまま黙って下を向いて、下唇を噛む。

「死にたくなかったら出撃はやめとけ、別に止めはしないけどな。ただ、相手の実力はヴァルキリーと同等だろうよ。」

表情を曇らせるヴィセンテに、ニネットは問い詰める。

「何か裏付けるものがあるのか？」

「・・・恋は盲目って、よく言うだろ？ただの臆^{ひそ}慮^きさ・・・」

そのときヴィセンテは遠くを見つめていた・・・

あの日、コアを強奪したあのISは、ヴィセンテの読みどおりこちらに危害を加えることなく、上空へと去っていった。

あのISのことが心に引っかけり、空虚な1週間が過ぎ去っていった。

放課後、ヴィセンテの命令で授業に使った教材を資料室へ片付けに行ったとき、アルダが一人で襲撃された日のモニタービデオを見ていた。

「・・・何してるんだ？」

「あ、一夏くん・・・一週間前、ISが襲ってきたでしょ？そのI

S乗りがさ・・・私の尊敬する人に良く似ててね。」

「・・・一体、どんな人なんだ？」

二ネットから、大体どんな人物かは聞いてるもののここで一度『クラウディア』について
詳しいことが知りたかった。

「今年の5月前に出会ってね、ISの操縦もうまいのに他のことも
なんだって出来る・・・なんたる、私にとってのスーパーマンみたいな人だった。

デンツァ先生と仲が良くて、付き合ってるのかどうかって事で友達と一緒に尾行してみたわけ。

そして、気づいたらこつちが尾行されてたり、お兄ちゃんが倒れたときもがんばって助けてくれた。

・・・でもね・・・思い出せないんだ。」

「思い出せない？」

「うん、8月あたりから転校してくる2週間ぐらい前まですっぱり記憶が抜けてるの。」

なんだか、悪夢にうなされてるような感じで、気づいたら、私はベットのの上に寝ていてお兄ちゃんが泣きながら私の手を握ってくれた。

その日から、私は一度もクラウディア教官に会ってないし、友達もなんか気まずそうだった。」

俺の脳裏に、あの日記の惨劇が、1ページ、また1ページと思い出される。

☞ 8月15日

クラウディア教官が死んだ。

8月28日

頭が痛い。もうどうにかなりそう。
いたい たすけて おにいちゃん

9月、日

もういや！ あたまがいたい！
きょうもあいつらはわたしのところにやってくる
たすけてよ！たすけにきてよ！おにいちゃん！

9月、4日

わたしひとをころした
あいつらをころしてやったんだ
つれてかれる ころされるかも しれない
わたしがわたしじゃなくなる おにいちゃん

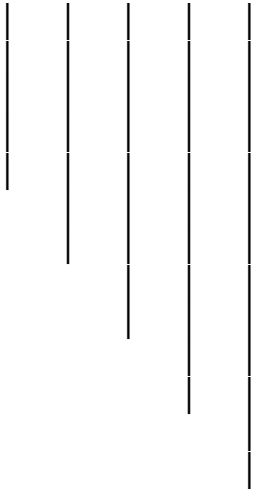
、
月一日

みんな

しん な

じゃ

え



え じゃ ん し た わ す る こ



「……大丈夫？一夏くん。汗がひどいけど……」

目の前に心配そうなアルダの顔があった、自分で額の汗をぬぐう。生ぬるい感触が、こめかみを通り顎に伝わる。

軽い深呼吸で息を整える。

「保健室……いく？」

「いや、大丈夫だ。それで、何でそのビデオを？」

テレビの液晶を指で指すと、ちょうど操縦者の顔が映っていた。

目はバイザーで隠れてはいるものの、それなりに付き合いがあれば気づく人もいるであろう。

「うん。このビデオを見てると何かが思い出せそうなんだ……でも、それを思い出そうとするたびに頭が痛くなって結局何も思い出せないの。」

ふと、アルダの視線を追って見上げた空は、むかつくくらいに晴れ渡っていた。

二章 第三話 『クラウディアの記憶』 (後書き)

感想お待ちしております。

二章 第四話 『秋だ！プールだ！貧乳だ！』（前書き）

タイトルの事は、
気にしないでください。作者が何かに目覚めた
だけです。

二章 第四話 『秋だ！プールだ！貧乳だ！』

日曜日

「なあ、一夏……」

朝、ニネットは開口一番に意味不明なことを言い出した。

「プール行かねえか？」

「………は？もう10月終わるのに、プールってどういふことだよ。」

そういうと、ニネットは購読している週刊誌の1ページを見せてきた。

何々？『いま、秋プールが巷で大ブーム！本書は特設ページの最後に10人分の割引券をお付けしました！』

秋プール……って、そんな聞いたこともないぞ。

「しかし、わかりやすいプロパガンダだな。」

「なあに、安く行けるに越したことはないさ。」

「10人か、俺とニネットと箒にセシリア、鈴にシャルとラウラとアルダと……弾に後は……山田先生と千冬姉は忙しいから……」

「ヴィセンテでも連れて行くか。」

メンバーを決めた後、俺たちはみんなに連絡を入れて12時、市民プールに集まることとなった。

「そういえば、なんで急にこんなの持ちだしてきたんだ？」

「作者が海かプールに行きたかったのに行けなかったからだだよ。」

「リアルタイムで見てる人にしか分からないネタだな・・・」

バスに揺られて30分、俺たち10人は市民プールの前に着いた。

「よし、着いたな。忘れ物はないか？（ところで・・・なんで箒たち、あんなに殺気立ってるんだ？）」

「「「「「「（一夏と二人きりで行きたかったな・・・）」「「「「「」

「・・・（。。（。ミ。ナンパ！（。。（。ミナンパ！）」

「一夏、誘ってくれたイタリア人ってこいつか？えーっと・・・」

「日本語でいいぞ。」

「あ、ああ、そうか。はじめまして。」

一通り雑談を済ませた後、割引券をスタッフに見せて水着に着替え、

待ち合わせ場所の流れるプールに集合した。

「む、箒。」

「い、一夏。そ、その・・・に、似合ってるか？・・・私の・・・
ゴニョゴニョ」

「え、何？」

「に、似合ってるのかと聞いたのだ！私の・・・水着姿・・・」

「お、おう、似合ってるぞ。」

「・・・！そ、そうか！それならよかった！」

そういつて、箒は身を翻し、流れるプールに飛び込んだ。
しかし、相変わらず変な奴だ・・・

みんなが見えなくなった後、篠ノ之 箒は流れるプールから身を引
き上げ、プールサイドの片隅で涙をこぼした。

「・・・おねえちゃん、ないてるの？かなしいことがあったの？」

幼い声が聞こえ、顔を覆っていた手をどけると小学校低学年程度の
男の子が怪訝そうにこちらを見ていた。

「悲しいことなんてなかったよ、泣いてなんかいないさ。」

「うそ、ないてるよ。だって、なみだがながれてるじゃん。」

「——いいや、悲しいことなんてなかったんだ。この涙は・・・嬉し涙っていうんだ。」

「ところで、ヴィセンテ先生はどこですか？」

溜息をつきながらニネットはセシリアの後ろを指差す。

ここまで行くと病気なのだろうか、プールの水に足を付けることすらなくめぼしい女の人をナンパしていた。

ああ、駄目だあの人。早くなんとかしないと。

「でも、ヴィセンテさんがなんか頭下げてねーか？」

弾の言葉で視線をヴィセンテに戻すと金髪にピアスという典型的な不良に頭を下げていた。

俺たちにきずいたヴィセンテが俺たちを呼びつける。

「おお！ 篝ちゃんにセシリアちゃん！ 鈴ちゃんにシャルロットちゃんとラウラちゃんとアルダちゃん！ あー、それとその他3人。」

「よし。帰るぞ。」

「「おう。」」

「いやいやいや！ 冗談冗談。キャー イチカクン カッコイイー」

「・・・ほう、ということは、少なくともそう思ったわけだ・・・」

「一夏君？女の子には言っではいけないことがあるんだよ。それはね、胸の事と、バストの事と、カップサイズの事よ・・・！！」

要は全部、胸の話じゃないか！本来は「年齢」と「体重」だけだろ！第一、3人とも貧乳なのは事実じゃないか！

——とても大きな手が俺の肩をつかんだ。
なぜだろう、俺の見間違いかな？なんで右手にメリケンサックが握られてるんだろう。

「えーっと、二ネットさん？あなたが右手にメリケンサックを握っているのは、僕の見間違いかな？」

「何を言ってるんだね、一夏君。健全なイタリア人の僕がメリケンサックなんて持つてるわけじゃないか・・・！」

体中にナノマシンを張り巡らせてる4分の1サイボーグのどこが健全なイタリア人だ。

「「と、言うわけで・・・」」

「死ね！」「逃げろ！」

その後、プールの職員につかまりこっぴどく叱られたのは言うまでもない。

日が傾き、辺りも暗くなりはじめ、俺たちはIS学園寮への帰路に就いた。

「……あー、ひどい目にあった」「」

全員、くたくたになりながら、夕食をどこで取るかを決めていた。

「適当にマックでいいんじゃないか？」

「折角来たんだから、ここ限定のものを食べたいな。」

「……安けりやいや。」

みんながみんなして、あーだこーだ言ってるので結局、決めかねたまま駅前に着いてしまった。

その時、シャルに不審な男が肩をぶつけてきた。

帽子を深くかぶり、もうすぐ11月だとしても多少厚着をしていた。

「ナンダ、アブナイジャナイカ。マツタク……」

男は自分でぶつかっただにもかかわらず、ぶつぶつ言いながら俺たちの横を通り過ぎようとしていた。

「——おい、その兄ちゃんよ。あんたのジャンパーの右ポケットの中身、ちょーっを見せてくんねえか？」

ヴィセンテが、その不審な男を呼び止めた。男は、何食わぬ顔で右ポケットに入っていた財布を取り出した。

「あ！それは僕のだ！返して！」

「ナニライツテイルンダ。コレハオレノダゾ。ナマエデモカイテアルノカ？」

「そ、それは・・・」

「マツタク、サイキンノコドモハ・・・」

再び、ぶつぶつ言いながら右ポケットに財布をしまいこみ、足早に逃げようとする。

「——ところがどっこい。確かに財布に名前は書いてないようだが、その財布の紙幣には名前が書いてあるんだぜ。シャルロットちゃん紙幣に名前を書くからな。」

そして、男は耳まで真っ赤にして反論した。

「ウソツクナ！シハイニ、ナマエナンテヒトツモカイテナカッタゾ！」

その男の発言を聞いて、ヴィセンテはニヒヒと、笑った。

「ああ、もちろん嘘だ。だが・・・おまえがとび抜けた馬鹿だつてことは証明されたな。さあ、シャルロットちゃんの財布を返してもらおうか！」

まんと、罨にかかった男は、懷からバタフライナイフを取り出してヴィセンテに向ける。通りすがりの人々は悲鳴を上げ、俺たちも足がすくんで動けなかった。ただひとり、ヴィセンテだけは表情を崩さないままファイティングポーズをとった。

「・・・一つだけ言っておこう。お前に俺は殺せない・・・いや、それどころかそのナイフを使いこなすことすらできない。」

そのまま、ヴィセンテは手で「かかってこい」と挑発し、のせられた相手がナイフを構え、ヴィセンテに突進する。

「なぜなら・・・！お前に人を殺す覚悟がないからだ！」

ヴィセンテは男の手首と腕をとつかみ、見惚れるくらいに綺麗な合気道技を決める。

投げ飛ばされた相手は、無様に地面へ顔を叩きつけた。

財布を取り返し、男は鼻血を流しながら、去って行った。

「さて、それじゃあうまいもんでも食いに行こうぜ！」

「え？だって、お前さっきマックって・・・」

「へへ、臨時収入、臨時収入っと。」

そついうと、ヴィセンテは自分の左ポケットのに手を突っ込み黒い財布をぶらぶらさせた。

「まさか・・・ヴィセンテ。お前・・・」

「投げ飛ばしたすきにちよいとね・・・なに、フアイトマナーだと思えばいいさ。」

夕陽をバックに、ヴィセンテはニヒヒと笑った。

二章 第四話 『秋だ！プールだ！貧乳だ！』（後書き）

では、この場を借りて一言

ISの八巻出たらどうしよう！

とりあえず出る前に完結できればいいなと思ってます。
じゃないと、この物語の立場無くなるしね！

二章 第五話 『現実是非情である。』（前書き）

楯無さんを登場させたかった。それだけ。

普段の長さの二分の一でお送りします。

二章 第五話 『現実是非情である。』

プールから帰った俺たちは、早く眠りに着くため部屋のドアノブに手をかけた。

「ただいまー……」

「いやん、一夏君のエッチ」

全速力で扉を閉める。その瞬間、水の流れる音を聞いて俺は再び全速力でドアを開けた。

頼む、誰か説明を……くれ

なんで楯無さんが俺の部屋に
いるんだ!?

それも、制服だったらまだ許せた。もう慣れたし、突っ込むのもめんどくさいし。でもね、身につけているのがバスローブだけって今まで人の部屋で何してたんですか?!

「ちょっと、シャワーが壊れちゃってね。」

「理由になってません。第一、大浴場があるじゃないですか。」

「もー。一夏君の意地悪」

とにかく今は早く寝たい……絶対にこの人のペースに飲まれちゃだめだ。

俺は藁にもすがる気持ちで二ネットにSOSのメッセージを送る。

「……あ、オレ用事思い出したわ。」

ニネットは、くるつと後ろを向いて、早足で逃げるように去って行った……

さよなら、俺の睡眠。こんばんわ、俺の疲労。

「ねえーいちかくーん」

「お断りします。」

「ひどっ！まだ何も言っていないのに。」

「はあ……で、用事は何ですか？早くシャワー浴びて寝たいんですけど。」

「私と……一緒に？」

そう言つて、楯無さんは頬を赤らめながら上目使いで俺を見る、その眼にはうつすら涙がにじんで……

つて！そんな顔で見ないで下さいよ！断れないじゃないですか！？

「あーもう！どうしていつもこんな風になるんですか！早く用件を言ってください！」

「新しく入ってきた転校生の彼に『ニネット』ルツケーシ部活動貸し出し』をやってもらおうと思つてね。」

「で、俺がニネットを説得しろと。」

これがニネットではなくヴィセンテだったらどんなに楽か……

しかし、泣き言は言ってられない。これは俺の労働が減るチャンスだからだ。ニネットを動かすとなれば・・・

そこで問題だ！

あのニネットをどう説得するのか？

？ ハンサムの一夏は突如天才的な話術を使いニネットを説得する。
？ アルダ、ヴィセンテのイタリア組が助けてくれる。
？ 説得できない。現実是非情である。

「なあ、ニネット。さっき、楯無さんから――」

「全力で断る。」

答え ？ 説得できない。現実是非情である。

・・・というか、説得以前に話すら聞いてくれないじゃん。

二章 第五話 『現実是非情である。』（後書き）

次あたりにシリアス突入しようか迷ってる。

二章 第六話 『IS製作大会』（前書き）

停滞期に話を書くとなぜか短くなってしまふ。

二章 第六話 『IS製作大会』

朝、俺がみんなと一緒に教室に入った時。妙な違和感を覚えた。目を凝らして確認すると、座席が一個多い。

自分の席に着き、朝っぱらから始まるヴィセンテの授業の準備をしていると、

相川さんたちの『井戸端会議』もとい『席端会議』が耳に入った。

「ねえねえ、知ってる？今日転校生が来るんだって。」

「へー、どこから？」

「それがさ・・・また、『イタリア』からだって。」

「えー！またー？」

席端会議の盗み聞きをしていたら、威圧感のある雰囲気を漂わせながら千冬姉と山田先生、さらに『自称』副担任補佐のヴィセンテが入ってきた。

「今日は、転校生を紹介するため。デンツァ先生のナンパ雑学は中止だ・・・入ってこい」

教室のドアを開く音とともに、小柄な女の子が一人、上履きの音を小さく立てながら入ってきた。

「ベアーター!!」

教室の後ろのほうで、アルダの嬉しそうな声が響く。

しかし、ベアータと呼ばれた少女はアルダをジロリと睨むと、自己紹介もせずにアルダの所へと向かう。

ベアータが俺の横を通り過ぎた時、彼女の纏う雰囲気、かつてラウラがこの学校に入ってきた時のそれに似ていることに気づいた。

「久しぶりだね。」

「ええ・・・久しぶりね。」

その雰囲気を感じ取っていないのか、感じ取ってもあえて無視してただけなのか。

HRの終了を告げるチャイムとともに、ヴィセンテが教卓の前に立った。

「ニネット、一夏。ちょっとこっちに来い。」

昼休み、箒たちと食堂に行くのを断り、俺とニネットはヴィセンテと一緒に、人目のつかない整備室の裏に連れて行かれた。

「今日転校してきた、ベアータ」メッデューについてだが・・・非常にまずい状況かもしれない・・・」

「ああ・・・確かにな。」

二人して珍しく真剣な表情で話を進める中、俺は全く話の意味がわ

からず口をはさむ。

「分かるように説明してくれないか？」

「・・・一夏。アルダの日記に『人殺し』の描写があるな。」

俺の脳裏にまたあの血糊が浮かび上がる。

1週間以上も前のことなのに、鳥肌が立ち、すうっと血の気が引いていく。

「アルダちゃんに殺された軍人はメッディ大尉だ。——そう、ベアータの父親だ。」

「つまり・・・知恵の実がどんな命令で送り出してきたとはいえ・・・私情でアルダにかたき討ちをする可能性があるということか・・・」

「

「うーん、60点だ。一夏、私情ではなくて・・・初めからアルダちゃんの暗殺が目的かもしれない。」

「ふざけるな！」

黙って話を聞いていたニネットが、ヴィセンテの胸倉をつかむ。

「どーどー、落ち着け。いいか？冷静に考えてみる。自分にとって『実力はあるくせに反旗を翻しかねない存在』は早いうちに芽を摘むものだろ？」

それに、ベアータが私情で殺したことにすれば・・・味方殺しで爺さんが責められることはない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「とにかく解散。俺は今から飯行くけど、お前らどうする?」

そう言つて、ヴィセンテは周りを見回す。

「あ、だったら俺は筭たちと食べに行くけど・・・」

刹那、俺に冷たい視線が突き刺さる。

えつと・・・俺なんかした?

「うるせえ、ほくねんじん朴念仁」

「ねえ・・・一夏君。」

「さつきから平然と部屋に居座ってますけど、一体何の用でしょうか?」

我が物顔で俺のベットに横たわり、楯無さんは一枚の企画書を出してきた。

「なにになに?『IS製作大会』!?」

「そう、この前の襲撃で緑色のISが取りこぼしたコアが3個入手できたの。それで、整備班チーム2つと一年生選抜+先生チーム1つでISを作ってもらい、戦わせようって企画。あ、事後承諾で悪いけど一夏君と二ネット君と簪ちゃんとヴィセンテ先生は1年生代

表つてことで出場が決定してるから。」

「だ、誰が許可したんですか！そんなの！」

「だれって、決まってるでしょ？ヴィセンテ先生よ。」

その晩、俺とニネットによつてヴィセンテ先生がしばかれたのは言うまでもない。

二章 第七話 『ベアータ「メッデー」』

「——位置について・・・始めッ！」

千冬姉の掛け声とともに、一夏とベアータは前に出る。

5時間目の模擬戦、転校生歓迎というかたちで一夏はベアータと戦うことになった。

理由は簡単、1組の専用機持ちの中で一夏が一番操縦が下手だからだ。

いきなり、ラウラと戦わせて完膚なきまでにやられてしまったら、自信の喪失につながりかねないという、千冬の粹な(?)計らいというやつだろう。

無論、一夏にとっては、とんだ迷惑だが・・・

ガキンッ！

雪片式型 とベアータのISが持つ細身の剣 レスピラーレ が火花を上げる。

もう一度切りかかるために、間合いを離れた瞬間、一夏はシールドバリアーがほとんど無いことに気づいた。

一夏は、いつ切られたかは分からなかった。

それもそのはず、雪片式型 と レスピラーレ が火花を上げた時、ベアータは既に一夏の腹部に六太刀入っていたからだ。

ISのパワーアシストと生身の小学生ですら扱える軽さのレスピラーレ だからこそできる技。

並みの人間の動体視力では、切られたことすらも分からない。戦国武将 上杉謙信の三太刀七太刀の伝説をはるかに上回る『一太刀七太刀』

一夏の額からどつと冷や汗が噴き出る。雪羅のブレードも出し、雪片式型 を中段に構える。

一步踏み込めばお互いの間合いに入る距離、張りつめた空気を破ったのはベアータだった。

目にもとまらぬ連撃で一夏を追い詰めていく。

一撃一撃は軽い、しかし 雪片式型 と雪羅のブレードの式段構えでも、ベアータの剣を捌き^{さば}きることはできない。

あっという間に一夏は壁に背中を付けてしまい、そのまま連撃の餌食となりあっさりと敗北した。

部屋に戻り、俺は自分のベットに倒れこんだ。

あまりにも情けない敗北。俺とは次元が違った。

夕飯を食べる気にもならず、ベットの上で寝っ転がっていると、夕飯から二ネットが返ってきた。

「おう。まあ・・・あれだ、そう気に病むな。あの間合いでベアータに勝負を仕掛けたのがそもその間違いだ。」

「なあ、二ネット。ベアータのISもお前が作ったのか？」

二ツト帽をかぶりなおしながら、二ネットは答える。

「いや、あれはヴィセンテが作ったやつだ。『ヴァンパータ』その他の機能をすべて犠牲にして、速さのみを追求したISだ。」

「でも、あんだけ早く動いてエネルギー切れとかは起きないのかよ。」

「エネルギー切れに関しては対策が二つある。まずは、今日のお前みたいにエネルギーが切れる前にぶっ倒す。」

「・・・弱くて悪かったな・・・で、もうひとつは？」

「そいつは、レスピラーレについているちょっとした仕掛けだ。
・・・突然だが一夏、俺たちにとっていちばん身近な猛毒って、
なんだかわかるか？」

「・・・セシリアの手料理？」

「うん、間違っではないない、間違っではないないが、もっと身近なものだ。正解は・・・酸素だ。」

「酸素？」

「そうだ。本来、酸素は生物にとって有害だ。酸化することによって、全てのものがぼろぼろになっていくのは、わかるよな？」

だが、生物の進化というのは面白くて、大気中に酸素が貯まると、今度は酸素を利用してエネルギーを生み出す。それが「呼吸^{レスピレー}」だ。」

「・・・つまり？」

「要は同じことだ、細身の剣の最大の「猛毒」である「衝撃」をあの剣は利用して「エネルギー」を生み出している。

だから、どんだけ切ってもあの剣に衝撃が与えられる限り、『ヴァンパータ』エネルギーが尽きることはない。」

「じゃあ、無敵じゃねーかよ。」

「じゃあ、逆に考えろ。要は・・・『あの剣に衝撃さえ与えなければヴァンパータのエネルギーはすぐ切れる』ということだ。」

「そうか！ってことは・・・」

「ベアータの剣を全部避ける！」

自信満々で言い切ったニネットの肩に、俺は溜息をつきながら手を置く。

「・・・それができたら苦労しないよ。」

「ですよー」

コンコンガチャリ

ドアがノックされると同時に開く。それってノックの意味ないじゃん。

「一夏！ちょっとこっちに来い！」

勢いよく飛び出してきた箒は、俺の服をつかんで部屋の外へ引っ張り出す。

「一夏！何だあの体たらくは！やはり、鍛錬が足りなかったようだな。ちょうどいい機会だ、明日から私が稽古をつけてやる。」

「ええ、いや、でも俺『IS製作大会』に出場することになってるし……」

「何を言うか！あんなものが避けられなければ。大会に出ても先輩方にあっさり負けるのがオチだ！」

『あんなもの』って……、あれ避けられたら国家代表レベルだと思うぞ……

「——『あんなもの』だなんて、言わないで頂けます？篠ノ之箒さん？」

黒いストレートのロングヘアーに、鋭い眼光の少女。ベアータ「メッデイー」が箒の背後から話しかける。

「お前はッ——！」

「……『お前』じゃなくて、私にはちゃんと『ベアータ』っていう名前があります。……次に『お前』なんて言ったら、怒ります

彼女の持つ、独特の凄みに俺と箒は圧倒されていた。

「. . . う」

「え・・・？」

突拍子もない発言に2人そろって大声をあげてしまった。

「い、いや……特にないけど……」

「は、はあ……」

157

からめてきた。

「なっ、何をしているんだ!」

ぐるりと、腕をからめたままベアータは箒に振り向く。

「そういえば・・・一夏さんと篠ノ之さんって付き合ってるんですか?」

カアツと、箒の顔が赤くなる。

「そ、そんなわけないだろう!私と一夏は付き合っておらん!」

「そうですか。」

するとベアータは、箒に向かって妖艶に微笑む。

「——じゃあ、私が貰っても・・・別に構いませんよね?」

二章 第七話 『ベアータ』メツデイ』（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

二章 第八話 『ゴミも積もれば山となる』

「・・・なあって、冗談ですよ。」

「へ？」

緊張から解放された箒が間の抜けた声を出す。

「それでは、明日の放課後・・・アリーナでお待ちしてますね。」

キュッキュツと、上履きの音を立てながらベアータは自室に戻って行った。

「ふう・・・一体何だったんだ？」

「バ・・・」

眩きのようなものが聞こえ、俺は振り返る。

するとそこには、箒が頭から湯気を出し、肩をプルプルと震わせていた。

ボソボソ聞こえる箒のつぶやきに耳を傾ける。

「一夏の・・・一夏の・・・」

「・・・俺の？」

「一夏の・・・一夏のばかあああああ!!!!」

手に持っていた竹刀を俺の顔面に向けて投げつけ（もちろんクリーンヒット）

箒はポニーテールを揺らしながらどこかに走り去って行った。

「それでは一夏さん。ISを展開してください。」

言われたとおりに、雪羅を展開し 雪片式型 を構える。

顔をあげると、ベアータも展開を終わらせていた。

箒の紅椿よりも濃い赤色の機体『ヴァンパータ』

徹底的に無駄を省いたそのボディーは、りりしさを醸し出している。

「まず、言うておくことがあります。一夏さんの零落白夜は確かに強力ですが、それ自体が当たらなければ意味がありません。」

「ふむふむ。」

「だから、裏を返せば『どんなに軽い攻撃でも、当たればそれなりの意味はあるんです。』つまり、『ゴミも積もれば山となる』日本のことわざですね。」

・・・ゴミも積もれば山となる？俺の記憶違いか？

「さあ、実践です。まずはあなたのお姉さんの出席簿並みの速さを目指しましょう！」

「無理！絶対無理！」

「やってみなきゃ分かりません！」

二時間経過・・・

腕が棒のようになり、力尽きて俺はアリーナに倒れこんだ。

「し、死ぬ・・・」

「・・・ハア・・・ハア・・・きよ、今日はこれくらいにしましうか。」

「ああ・・・」

お互い肩で息をしながら、スーツの砂をはらい立ち上がる。

「いいですか・・・要は、『ゴミも積もれば山となる』これを念頭においてください。」

「・・・ところで、ベアータ。」

「はい。なんですか？」

「ベアータがさつきから何十回と言ってるそれ、『ゴミも積もれば山となる』じゃなくて『塵も積もれば山となる』じゃないの？」

「——ああ！ い、いや・・・ええつと・・・その・・・」

ベアータが顔を真っ赤にして、パニックに陥っている。

「（お、おおおおおおおお落ち着きなさい！そ、そうよ！言い間違
いなんて誰にでもあるわ・・・誰にでもあるのよ！

ああ、私は馬鹿だ・・・大馬鹿だ！なんで昨日覚えたばかり
のことわざなんか使ってしまったのよ！

ああああ、なんてことを・・・お、落ち着きなさい私！い、イ
タリア軍人は動じない・・・イタリア軍人は動じない！

いや落ち着きなさい、こんなときは素数を数えるのよ！！

1 7 ・ 2 ・ 3 ・ 5 ・ 7 ・ 1 1 ・ 1 3 ・
1 7 ・ 1 9 ・ 2 3 ・ 2 9 ・ ・ ・ って、違う！1は

素数じゃない！

そうだ！空を見て深呼吸すれば・・・ああ、今日も空が青いな
ーアハハハハ・・・って、現実逃避してどうすんのよ！

よよよよよよし落ち着け、いや私は落ち着いているわ！！

周りの人をカボチャやピーマンと思えばいいのよ！

カボチャ・・・ピーマン・・・カボチャ・・・って、私と一夏
しかないなーい！

あああ、どうしようどうしようー！）

「・・・もしもし、ベアータさん？」

「うひゃああー！！」

ベアータは、身振り手振りでもオーバーリアクションをしながら、脳
内会議を続けていた。

「と、とにかく！今さっきのことは忘れて・・・ほんとに忘れなさ
いよー！？」

「あゝ．．．うん．．．」

PVアクセス 2万回突破記念 イタリア製IS紹介

『ウィリディタース・イヴ』

パイロット アルダールルツケーシ

開発国 イタリア

機体世代 2世代

装備 『罪と罰（Devil and Angel）』

『リベリオン』

『量産型グレネード』

待機形態 足首のミサンガ

説明 パイロットの兄である『ニネットⅡルツケーシ』が製作。
散弾をばら撒きながら、一気に接近しスラッグ弾を至近距離で打ちこむという戦法を基本とする。

この戦法を手助けするのが、『瞬時衝動』と言われる。『瞬時加速』の改良型である。

「本来！瞬時加速には慣性エネルギーを得るためにタイムロスが生まれた。

しかし！瞬時衝動ではそのプロセスを限界まで効率化。
さらに戦闘が開始直後からエネルギーを圧縮し続けることによって、

タイムロスを完全に無くした！」

b y^{システム}ニネット

ただし、3倍のエネルギーを消費するため、下手くそが操縦すると目も当てられない事態に陥る。

リベリオンは、ついさっきまで（作者が）存在を忘れていた。

作者コメント・・・実は僕、拳銃よりもライフルよりも『シヨットガン』が大好きなんです。ISの2巻か3巻あたりを読んだときに「シヨットガン成分が足りない！」と思って、ものの30秒程度でこの機体を妄想しました。で、頭の中で動かしているうちに「よっしゃ、一つ書いてみるか！」となりまして、作られたのがこの『すべての道はローマに通ず』です。

アシスタントを担当した研究員A「イタリアの技術力は世界一イイイイ！！」『^{フルッタ・プロイビッタ}禁断の果实』の機体を基準にイイイイ！！この『ウイリディタース・シリーズ』は製作されているのだアアアア！！」

『ウイリディタース・アダム』

パイロット 昔（クラウディア＝バルダッサーレ）↓今（まだ秘密）

開発国 イタリア

機体世代 3 世代

装備 『オビディエンス』

『量産型対戦車ライフル』

待機形態 金のイヤリング

説明 V・Eと同じシリーズではあるが、おもな設計、製作は『ヴィセンテ』デンツァが担当。

大型の8機のビットが、内蔵されたAIによってそれぞれ独立して動き、V・Aの戦闘を補助する。

作者コメント・・・実はヴィセンテとかクラウディアは過去編に入ってから、新しく作ったキャラです。

ちなみに、当初ヴィセンテは過去編でお亡くなりになる予定でした。

ニネット「じゃあなんで生きてんの？」

ヴィセンテ「テンプレ的イタリア男はお前じゃやりにくいんだと」

ヴィ「ちなみにいいこと教えてやろう」

ニ「なんだよ」

ヴィ「お前は発案当初、男なのにIS操作したり、そのISの待機形態が舌ピアスだったり、街角で女の子を口説いたり、今のお前から、想像もつかないようなキャラだったそうだな。」

ニ「全く別人じゃねえか！」

ヴィ「一応、年上に対して敬語を使わなかったり、仮にも大佐をじいじ呼ばわりするその柄の悪さは、舌ピアスの名残らしいな。」

作者「正直、ニネットは発案当初、ただの不良っ
て感じていたからね」

『ヴァンパータ』

パイロット ベアータ・メッディー

開発国 イタリア

機体世代 2世代

装備 『レスピラール』

『量産型グレネード』

待機形態 アイディア募集中

説明 その他の機能をすべて犠牲にして、速さのみを追求したIS。
風の抵抗などを最小限にするため、腕の装甲には風を切るた
めのエッジが付いている。

常人では視覚出来ないほどの速さで切りつけることが可能。

作者コメント・・・当初は二刀流キャラでしたが、路線変更
で一本になりました。

新しくなるにつれて、コメントが短くなるとか言わない。まだ思い入れとか特にはないんです。

二「特に言うことねえんだよな・・・」
ヴィ「3万回アクセス記念に期待しようぜ。」

二章 第九話 『@クルーズ 一日目』

「あ、おりむー。IS製作大会の参加メンバー決まったよー。」

だぼだぼの服を着て、こっちにのほほんさんが迫ってきた。

あれでまともに生活できているというのだから感心する。

俺は、のほほんさんの右手にあったプリントを見る。

『参加チーム 織斑チーム（1年） 更識チーム（2年） 篠ノ之チーム（1年）』

・・・ん？見間違えだよな・・・

俺はごしごしと目をこすり、もう一度プリントを見る。

『参加チーム 織斑チーム（1年）更識チーム（2年）篠ノ之チーム（1年）』

「（あ・・・ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『俺は上級生が出るものとはかり思っていた 製作大会に第3が出場していた』

な・・・何を言ってるのか わからねーと思うが

俺も何が起きてるのかわからねえ・・・

頭がどうにかなりそうだ・
・
・

話の都合だとか作者のお気に入りだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ……

もっと恐ろしい何かの片鱗を味わってるぜ……」

「……どしたの？おりむー。」

のほんさんが俺の顔を覗き込む。

「えつと・・・確か、3年の整備班の方々も出るはずだったんじゃない？」

「あゝ、それがね」

多少、時間が遡り
ベアータとの稽古を約束した
その後……

h

生徒会室で缶詰になり、ようやく製作大会の書類を作り終えた楯無は、ぐつと背伸びをして虚の淹れた紅茶を飲み干す。

「やっと終わったー！今日はぐっすり寝・・・」

ኢኮኖሚክስ

生徒会室、否、学校中に響き渡る足音が聞こえた瞬間、生徒会室のドアがぶち抜かれた。

ちなみに比喻ではない。繰り返し言う、比喻ではない。

何事かと思い、プスプスと上がる煙を払った先には、顔に青筋を浮かべた箒が立っていた。

「え、えーっと・・・」

啞然としている楯無に箒が歩み寄る。

「楯無先輩！」

「は、はい・・・」

あまりの威圧感について敬語になってしまったが、とりあえず机とすを整えて、話を聞こうとする。

「私も製作大会に出場します！」

「えっと、じゃあ・・・一夏君のチームに編入ってことね？」

「いいえ、私が一夏と戦います！・・・」

「え、ええー！」

さすがの楯無も驚き、声を上げる。

「で、でも、誰がISを？」

「それはヴィセンテ先生が直々に作ってくださいます！」

後ろでヴィセンテが小さい白旗をひらひらさせていた。

さらにその後ろでは、簪が殺気を漂わせていた。

「・・・（簪ちゃんとはかく、ヴィセンテ先生・・・お気の毒に・・・）」

心の中で合掌する。

「・・・で、どうしてもなの？」

「はい、どうしてもです！」

「・・・（しょうがない。先輩方には私のチームに入っていたかどうかという形で我慢してもらいますか・・・）」

可愛い後輩と妹のためなら、労力を惜しまない根っからのお姉ちゃん気質の楯無であった。

時間は戻り 今現在

「・・・そういうわけだから、大会がんばってねーおりむー」

トテトテと、のほんさんはどこかに走り去り、俺は一人ポツンと残された。

「・・・寝よう」

「さて、一夏。突然だか明日・明後日空いてるか？」

放課後、二ネットが唐突に話を切り出した。

「ああ、ちょうどベアータの稽古もないし空いてるけど・・・」

「じゃあ、その日にバイトを入れるからな。」

「・・・は？」

ごめん、ちよつと言ってる意味がわからない。

「だから、金銭が足りないからバイトを入れるんだよ。ISの部品だつて安くないんだ。」

「製作大会のことか？確か部品代は学園が負担してくれるんじゃない？」

「ある程度まではな、最新鋭の装備を入れるとなったら、一部はこっちが自腹を切るしかない。」

「でも、どこでバイトするかなんて決めてるのか？」

そついうと、二ネットは一枚のチラシを手渡す。

メイド服や執事服を着た従業員が写っており、真中にでっかく@マークが印刷されている。

「・・・ひょっとして・・・そういう趣味？」

「ち、ちがう、断じて違う。・・・昨日、デュノアから聞いたんだ。ここなら短期間でそれなりに給料もいい。ちなみにアルダも行くらしい。」

「・・・しょうがない。わかった、何か準備は必要か？」

「羞恥心を捨てろって言われたよ。」

・・・それはごもつともだ。

「・・・で、なんでお前らがここにいるんだよ！！！！」

翌日、俺たちが@クルーズ（原作4巻参照）という喫茶店にやってきたら、

何と俺たちだけでなく、箒や簪、さらにシャル・ラウラ、一番驚いたのはヴィセンテまでもバイトとして来ていたのだ。

「それはこっちのセリフだよ。昨日シャルロットちゃんに教えられたんだ。まさかお前たちまで来てるなんてな・・・」

「・・・ちなみに動機は？」

「箒ちゃんたちのメイド姿が見たか——何でもない。予算的に学園の負担だけじゃ足りなくなったんだよ。・・・で、お前のほうは？」

「アルダのメ——何でもねえ。お前と同じ理由だ。」

ひとまず男女に分かれて、メイド・執事の服装に着替えることになった。

業務連絡）作者の絵心の無さにより、挿絵はありません。心の目でカバーしてください。

「うん！みんな似合ってるじゃない！」

メイド服に着替えた店長が俺たちを見回して言う。

「・・・そういえば、ニネット君のだけ違いますよね。僕たちは同じなのに」

シャルがそう質問すると、店長は眉間を抑えた。

「あー、それがね・・・ほんと全員同じにしかつたんだけど、サイズが合わなくてね・・・彼に関しては執事服というよりは用心棒^{ウッサー}の恰好だし・・・」

たしかに、ニネットだけやけに動きやすそうな恰好をしている。

元が引き締まった体つきなので、これが本職だといわれても違和感がなかった。

「まあ、業務に問題はないと思うぞ？」

「それもそうね！じゃあみんな、今日・明日と張り切って行きましようー！」

「了解！」「」「」「」

「織斑君とルツケーシちゃんは6番テーブルに、デユノア君は2番テーブルにそれぞれコーヒーと紅茶を一つずつお願い。」

いつもより2割増しで客が多い@クルーズ、しかもその大半は女性客で合った。

それは、ただ単に女性優遇社会だからというわけではなく、意外な・・いや、当然と言えば当然の理由がある。

「チャオ、僕はヴィセンテと申します。ご注文はいかがなさいますか？お嬢様。」

「え、えーっと。じゃあ・・・エスプレッソをお願いします。」

「かしこまりました。エスプレッソですね。それにしても奇遇ですね、僕もエスプレッソは大好きなんですよ。」

「おいしいですね。私も大好きです。」

次のセリフに注目

「ええ、ひよっとしたら僕たち赤い系でつながってるのかもしれないですね。」

「え？そんな・・・コーヒーの好みだけで・・・」

「確かに、少し大袈裟だったかもしれませんがね。でも、『僕はあな
たのその綺麗な瞳が好きになってしまいです』」

「えっ……」

とびっきりのナンプスマイルで女性客を骨抜きにした後、さっそう
と次のテーブルに移った。

そう、生粋のイタリア男のヴィセンテがオーダーをとった女性客を
口説いて回るのだ。

普段は制止役を務める二ネットも今回はさじを投げた。

ちなみに店長のほうも宣伝効果になってるからと止める気配は全
くない。

「……まあ、言うのも悔しいが、イタリア軍屈指の美青年で通っ
ていたからな……あいつは……」

「さっき、口説いた女の人の数が30人超えたよ。」

「……一日に口説いた数の自己ベスト更新かよ……」

一方、アルダのほうは食器をかたずけているときに一人の男性客か
ら声をかけられた。

「ねえ、名前教えてよ。俺、君がもろタイプなんだよ」

「え？……なんで？」

キョトンと、首を傾げて受けこたえる。その無邪気さが男性客のハ

ートに火を付けたのか、少し強引に迫る。

「いいじゃん、名前くらい。つか、いつバイト終わるの？今すぐ早退してさー俺と遊びに行かない？楽しいよー」

「えっと・・・またいつかね。このお仕事も結構楽しいから。」

あくまで彼女は天然なのだが、完全に振られた男性客はアルダの腕をつかんだ。

「いいじゃん。早く行こうよ。」

グイツと男性客はいらつきながら、強くアルダの腕を引く。

「痛い！痛いよ！」

「あーもー、早くしろって——」

思いつきり引つ張ろうとした瞬間、男性客の後頭部に@マークのついたトレーが直撃する。

後頭部を抑えながら転げ回る男性客の前に、二ネットが現れる。

「な、テメえ！何すんだよ」

「申し訳ありません、お客様。手が滑りました。」

「んなわけねえだろ！ぜってーわざとだろ！」

「本当に申し訳ありません、お客様。手が滑りました。」

実際、わざとなのだが、無表情でそれを否定した。

「い、いや・・・だって、トレーが人の頭に直撃するとかあり得ないし・・・」

「いいえ、手が滑りました。」

無言の圧力に、男性客も声色が弱くなってる。

「だから・・・」

「手が滑りました」

「・・・はい・・・」

男性客A・・・完全沈黙

その後もいろいろあったものの、なんだかんだで一日目は無事終了した。めでたし？

2日目続く

二章 第九話 『@クルーズ 一日目』 (後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております

二章 第十話 『@クルーズ 二日目』

「さて、今日はとっても重要な日です。なぜだか分りますか？」

全員が昨日と同じ格好に着替えた後、店長が全員を見回しながら質問する。

「・・・玄関に置いてあった、『レディースDAY』のボードのどこか？」

「その通り！」

店長がかわいらしく二ネットにウィンクする。

二ネットは多少たじろいだものの平静を保っていた。

「そういうわけだから、ヴィセンテさん。がんばってくださいね！」

「いやあゝ、美人の言うことならなんだって聞いちゃいますよ！」

馬鹿野郎と、二ネットがぼつりと溜息とともに漏らした声は、店の喧騒にかき消された。

「・・・重要な日と言いましたけど・・・だいたい何割ほど・・・お客さんは増えるのですか・・・？」

簪が小さく手を上げる。

店長はほつぺたに指を当てて考えた後、レジのパソコンを動かしに行った。

「あつた、えーつと・・・先月の奴はだいたい4割から5割は増えてるわね。」

「そんなにですか!」

「ええ、ボードを見てみたらわかるけどケーキや紅茶が半額なってるからね。」

二ネットが怪訝な顔をする。その格好で眉間にしわが寄るとほんとに怖いからやめてくれ。

「そんなんで店の利益はどうなんだよ?」

「まあ、『レディースDAY』自体は、利益の向上というよりはみんなに店を覚えてもらうことをコンセプトにおいてるからね。さて、そろそろ開店よ!」

2日目スタート

「・・・」、コーヒーをお持ちいたしました・・・ご、ご主人様・・・」

着なれない(着なれているのも変な話だが)メイド服や、普段の自分とは150度ほど違う言葉遣いに、箸はがちがちに緊張していた。

「(うつ・・・和服が恋しい・・・)」

正直、この2日間誰からも声をかけられないことを望んでいたが、生まれ持ったポテンシャルが良いせいで既に何度も男性客はおるか女性客からお呼びがかかっている、

スラリとした身体に加え、はつきりとした女性的な体のラインに一部の男性客は釘付けになっていた。

「（穴があつたら入りたい・・・）」

恥ずかしさに悶えながらも、仕事はテキパキとこなす筈であつた。

「そつえば、デュノアくん。」

「はい？」

ようやく仕事がひと段落つき、簪と交代して、くつろいでいたシャルが店長に話しかけられる。

「今日はほんとにありがとうね。ちょうど、人が足りなかったところなのよ。」

「い、いやぁ・・・どういたしまして・・・」

実は、ほんの少し前からシャル宛てに「またバイトに来てほしい」という店長からのオフアールが来ていた。

成り行きでバイトしただけでなぜ自分たちにもオフア―が？と思っていたがこれでようやく彼女も納得した。
単に『レディースDAY』のために美男美女の頭数を増やしたかっただけなのだ。

ちなみにそのオフア―はメイド服が着てみたかった彼女にとっても渡りに船だった。

「（また、執事服かと思ったけど・・・メイド服が着れてよかったー）」

ヴィセンテ達を誘ってよかったと、つくづくそう思った。

しかし、くつろいでいるのもつかの間、ホールの方から奥の厨房まで響くような怒号が走る。

「おいおいおいおい！！てめえーらのここはどういうサービスしてるんだ！？アア！！」

何事かと思い、店長たちがホールに向かうと金髪に染め上げた髪をワックスでツンツンに固めた、いかにもチンピラといえる恰好をした男がオーダーをとっていた簪に怒鳴り散らしていた。

「・・・も・・・申し訳・・・ありません・・・」

「ハア？何言ってるのか聞こえませーん」

「声がちいせーんだよ」

うろたえる簪を面白がるように金髪の周りの奴らも彼女にちよつかいを出し始めた。

「・・・ねえ、アルダ。簪がいったい何をしたの？」

「ううん、何もしてないよ。注文してないのに、カレーを注文したっていちゃもんつけだして、違うといっても注文したの一点張り。」

「そんな・・・」

チンピラ連中が下品に笑う中、キャバ嬢のような女が簪の足を踏みつける。

「痛ッ・・・」

簪がキャバ嬢を睨みつける。

その眼が気に食わなかったのか、キャバ嬢は立ち上がり簪に掴みかかるうとした瞬間に、横っぱらをラウラに蹴飛ばされた。

「おとなしくしている、仕事の邪魔だ。」

「調子乗ってんじゃねえぞ！」

キャバ嬢の取り巻きの一人がラウラに向かって振りかぶったこぶしを振り下ろす。

パシンツと、乾いた音が鳴ったと思ったら、そのこぶしはヴィセンテによって止められていた。

その行動は、殴った取り巻きどころか、ラウラまでも驚かせた。

ヴィセンテは、誰にも気づかれずラウラ達の間に入り込みこぶしを手のひらで受け止めた。

そう、『誰にも』気づかれなかった。

気配を消した、言うのは易いが出来るものではない。

それをヴィセンテは、いとも簡単にしかも任務の最中ではなく日常生活の中でやってのけた。

「——お客様、これ以上はほかのお客様の迷惑になりますので、お引き取り願います。」

「………チツ！」

今まで散々いちゃもんをつけて居座っていた連中が、たった一言で店を出ていった。

連中が出ていったのを確認すると、ヴィセンテは一気に脱力した。

「ふ~~~~。こ、怖かったー」

「「「「こ、こわかったー?!」「「「「」

それは、数十秒前のお前のことだよと、店中のだれもが心の中で突っ込んだ。

「いやー、なんかいろいろあったけど楽しかったなー」

「だねー」

その後は特に問題は起きずに俺たちは2日間にわたるバイトを終えて帰路についた。

それぞれが思い出を語り合う中、デパートに続く十字路で、今まで黙りこくっていたヴィセンテが口を開いた。

「そういえば、買ったかった物があつたんだ。ちょっと買ってくるから先に帰っていてくれ。」

そう言つて、十字路を右に曲がり、ヴィセンテはデパートの方へと消えていった。

「・・・・・・・・・・」

その背中をラウラは訝^{いぶか}しげに見つめていた。

二章 第十話 『@クルーズ 二日目』 (後書き)

ご意見 ご感想お待ちしております。

二章 第十一話 『ヴィセンテ＝デンツァ』

日も短くなりすっかり暗くなった夕方、ヴィセンテが歩く。
まるで、後ろを歩く人間をわざと人気のない場所へと誘導するかの
ように・・・

そう、もともとヴィセンテが買ったものなどなかったのだ。
昼のことを根に持ったチンピラどもが自分達の後をつけていたこと
に彼は初めから気付いていた。

やがて、完全に人目のつかないところまでチンピラどもを誘導し、
彼は向き直った。

「で、何か御用？昼の一件じゃあこっちに非はないと思うんだけど
ね。」

昼間のキャバ嬢の腰巾着3人と金髪の男、二ネットが霞んで見える
ほど大柄な男が1人。

合計5人にヴィセンテは囲まれていた。

「デメえ・・・よくも恥かせてくれたな・・・落とし前つけても
らうぞ。」

殺気を纏いながら脅しをかける金髪をヴィセンテは鼻で笑う。

「落とし前？冗談きついな。そちらの自業自得じゃないか。」

相手を挑発するような声色でヴィセンテは話す。

その人を食ったような態度が癪にさわったのか大柄な男がヴィセンテの前に出る。

近くで見るとやっぱでかいなあ、とヴィセンテは動じず構えすら取ろうとはしなかった。

次の瞬間、大柄な男は右手を振り上げる。

鍛えられた身体から繰り出されるパンチをヴィセンテはすれすれでかわす。

その流れるような動きは芸術といっても差し支えなかった。

男は後ろに跳び、構えるが、ヴィセンテは構えようとしなかった。片手をポケットに入れ、少し膝を曲げただけの恰好。

戦うという気力すらあるのか分らない。

しかし、そんなことはお構いなしに男はヴィセンテに殴りかかる。

轟と空気を震わせる音が、路地裏に響く。

軽量級ボクサーなどと比べるのも失礼なほど、男のパンチは鋭い。だが、いずれも拳は空を切るばかりで、ヴィセンテに当たることはない。

羽虫のように、ちょこまかと動くヴィセンテに男はいらつき始めていた。

熊のような大男が一見ひよろりとしているヴィセンテに遊ばれている。

躍起になってシャドーボクシングを繰り返す男はすっかり息が上がってしまった。

顔を真っ赤にしながら、男は怒鳴る

「貴様あ！！！！せめて構えぐらい取れ！俺を侮辱しているのか！！！！」

馬鹿だよなあ、とヴィセンテがつぶやく。

「侮辱かどうかはさておき、俺はあんたを馬鹿にしてるよ。現に馬鹿だし。」

やれやれと、ヴィセンテは肩をすくめる。

「だいたい何で構えなんてとる必要があるんだよ。『次は殴りますよ、次は蹴りますよ』って教えてるのと同じじゃないか。後出しじゃんけんで負ける馬鹿がお前を除いてどこにいるってんだ？」

そう、ヴィセンテは構えなかったのではない。

彼には構えるという概念すらなかった。

強いて言うならば、普段の姿がそのまま構えとなる。

いわば、彼は常に戦闘態勢をとっているということになるのだ。

男は肩をつきだし、ヴィセンテに突進する。

当たれば、ただでは済まない。

しかし、ヴィセンテはそれを避けようとせず、真正面から待ち構える『。

男とぶつかる瞬間に繰り出されたヴィセンテの初めての攻撃。

それは、正確に男の喉仏を突いていた。

見えない壁にぶつかったかのように、男ははじき飛ばされる。

数回、喉を押さえ痙攣した後、男は意識を手放した。

金髪達に戦慄が走る。

大男の脈拍を確認し、気道を確保した後、ヴィセンテはゆっくりと立ち上がる。

腰巾着共はそろって腰を抜き逃げる中、金髪の男だけは何とかヴィセンテの前に立ちふさがった。

スツと、男はおもむろにナイフを取り出す。

ヴィセンテが丸腰なのを理解しているのか、男は勝ち誇った様な笑みを浮かべる。

はあ、とヴィセンテは深いため息をつく。

「おいおい、ナイフはリンゴの皮むくとき以外はポケットにしまっつけて、ママに教わんなかったのか？」

「あ？なんだよいまさら。怖気づいたのか？」

男がナイフの切っ先を揺らす。

物分かりの悪い野郎だと、ヴィセンテは舌うちをする。

「なあどうした？テメえが来ねえんならこっちから——」

「——雑魚が粹がるなって言っただよ——！！」

音も鳴る間もなく、ヴィセンテの拳が金髪の腹に突き刺さる。

一瞬遅れて鳴った、空くうを切る音を最後に金髪は目の前が真っ暗になった。

男二人を並べて寝かせて、路地裏を出たとき、ヴィセンテはラウラが立っていることに気づいた。

「……もうすぐ門限だ。早く帰った方がいいぜ、ラウラちゃん。」

「……今までのあの弱さはすべて演技だったということですか。」

重い空気が二人を包む、数秒の沈黙を破ったのはヴィセンテだった。

「……さてね、意識して演技したつもりはない。」

「……初めから気付いてましたね。あいつらが先生のことをつけていたのを。」

「ああ……まあ、今回のことは黙っといってくれ。ルックス・知能・運動神経すべて完璧な奴はモテないっていうしな。」

普段ならツツコミの一つでもはいるところだが、あいにくラウラにその余裕はなかった。

「黒ウサギ隊のデータベースに乗ってましたよ。最上級要注意人物として。」

ラウラは、真新しい黒いファイルをヴィセンテに投げ渡す。

「いろいろ調べさせてもらいました。自ら開発したナノマシンによる人体強化、

イタリア軍上層部との関係、急進派に反対意見を持つ要人の暗殺・

・
聞かせてください……あなたの狙いは何ですか？

知恵の実 多目的精鋭部隊『ケルビーニ』隊長——【死神 ヴィセンテ】！！！！！」

二章 第十一話 『ヴィセンテ＝デンツァ』（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

二章 第十二話 『死神の眼』

「ほう・・・最近はずの解体ばかりしていると思ったが、やることはやってるわけだ・・・」

日が暮れて、お互いの顔すらもよくわからないこの状況で、ラウラは身構える。

あの貧弱でナンパ癖がありお調子者のIS学園の教師と目の前にいる【死神】と称される男が同一人物とは思えなかった。

「言い逃れることはできません。正直に話してもらいましょうか・・・」

「・・・いやだと言ったら？」

「力尽くても・・・しゃべってもらいます。」

ハハハハ、とヴィセンテが噴き出すように笑う。

「力尽く？なかなか面白いこと言うじゃねえか！市街地でライフルでもぶっ放すつもりかあ？」

「・・・こちら軍人だ。ISを使わなくとも格闘術の心得はある。」

そう言つて、ラウラは構える。

全く隙のない、完成されたファイティングポーズ。

いつでも、どこからでもかかってこいという、ラウラなりの意思表示。

顔も見えないヴィセンテの顔を睨みつける。

その時、急な冷氣とともにラウラの薄く白い皮膚に鳥肌が立った。

「——図に乗るなよ……ISがなきゃ何もできない」軍人もどき」が……！」

一言、たった一言で、ラウラは心臓をわじづかみにされる。

突然、いままで消えていた街路灯がつく。

ラウラは、死神の眼を見てしまった。

黒かつた。

今まで見てきた黒いものが、実は灰色ではなかったのかと錯覚するほど、彼の眼は深い黒色だった。

戦うための道具として生まれ、兵器として扱われた少女は恐怖した。

『試験管ベビー』ではなく、『人の子』として生まれ。

『誰かの意思』ではなく、『自らの意思』によって兵器となり。

ありとあらゆる兵器の操縦方法や戦略を『教わった』のではなく、『経験』して、

何十人、何百人の血の臭いを体中に染み込ませた。

目の前の【死神】に恐怖した。

⌈
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
!
.
.
.
.
.
.
.
.
!
⌋

手足が震える、喉に異物が詰まったかのように声が出ない。

腰が抜ける。
怖い・
・
・

後ずさる。怖い……

壁に背がつく。
怖い・

逃げ道がなくなる。
怖い……

怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い

プツリと、自分の中で何かが切れた音がする。

【死神】がしゃがみ込み、まっすぐラウラを見つめる。

「今日のことは・・・忘れる。その方がお前のためだ。」

声がかけられる。不思議と心が安らぐ

「はい・・・」

素直に彼女は返事をする。うたた寝のような心地よさが全身に回る。

「ラウラちゃんはいいい子だから。——先生の言うことはちゃんと聞いてくれるな？」

「はい・・・らうらは・・・いいことから・・・せんせいのいうこと・・・ききます・・・」

催眠術にかけられたように、ろれつの回らない虚ろな返事をする。

「じゃあ、今日はバイトが終わって俺と一緒に買い物をした。たったそれだけだった。いいな？」

「はい……きよおは……ばいとして……せんせいと……かいものをして……かえりました……」

立て、と言われて、ふらつきながらも『ラウラ』は立ち上がる。

「じゃあ、帰ろうか。」

「……………はい」

死神と少女はそのまま帰路についた。

翌朝、ヴィセンテは学園の屋上でグラウンドを見下ろしていた。

「…………（昨日の出来事はボーデヴィツヒ以外には見られていなかった……あいつの記憶は上書きして、例のファイルも俺が灰になるまで燃やした。）」

ポケットから煙草とライターを取り出す。

健康に悪いことや歯につくヤニが嫌なので普段は控えているのだが、今回は煙草でも吸って落ち着かないとやっていられなかった。

「…………（帰りに酒と催眠状態とはいえ彼女が欲しがっていたものを買って帰ったから、寮の人間にばれているとは考えにくい……）」

ふと、煙草の火がフィルターの所まで来ていることに気付く。
腰に付けた携帯灰皿に煙草を処理すると、2本目を取り出した。

「・・・（ひとまず、安心して大丈夫か？・・・いや、油断は死に直結する・・・何か・・・何か見逃しているものはないか・・・）

」

腕に付けた時計を見る、7時40分。そろそろ、自室に戻った方がいいかもしれない。

「・・・（疑心暗鬼になってるな・・・だが、それぐらいがちょうどいいかもしれない・・・）」

煙草とライターをしまい、ヴィセンテは屋上の階段を降りていった。

「（死神・・・か。最後に言われたのはいつだったっけか・・・）」

二章 第十二話 『死神の眼』（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

二章 第十三話 『創られし究極』

「・・・これでよし。」

生徒会室のパソコンのキーボードを叩き、二ネットがつぶやく。
そのパソコンの画面を一夏は二ネットの肩から顔を乗り出して見ていた。

「注文終わったのか？」

「ああ、届くのは三日後らしい。」

二ネットがパソコンに打ち込んでいたのは、製作大会で使用するISの機体だった。

各自、部品のメーカーから材質、加工方法まで注文し、工場の方で機体の製作を行い、生徒が武器とソフトウェアの開発をする。

もちろん費用は学園がもつ。（高額のものになると一部生徒が自己負担する。）

「どついうのが来るんだ？」

「近距離パワー型のISだ。名前はまだ決めてないから、武器とかは後で調節する。」

「・・・な、名前から行くのか」

「当たり前だ。このご時世、名前ですべて決まるもんだぞ。（出番とか印象とか影の薄さの解消とか）」

名前うんぬんはともかくとして、二ネットの腕は確かなのだからそこは任せるとしよう。

そういえば、なんか二ネットがそわそわしている。
余程ISを作るのが楽しみなんだろう。

「ところで・・・三日後つてことは、おれはそれまで何してればいいんだ？」

「ああ、それなら・・・」

すると、二ネットは自分のバックをこそそと漁り、ポンツと俺に一冊の分厚い本を投げ渡す。

『必勝！乙女心・ナンパ マニュアル 著・ヴィセンテ＝デンツァ
訳・志尼我 巳太郎』

「・・・えつと・・・これは一体？」

「ヴィセンテの自費出版本。箒^{ヒロインズ}たちがお前に読めと言ってきた。」

「・・・広。苑と同じぐらいの厚さの本って一体・・・？」

「一度読んだことがあるが、ぶっ続けて読んでも1週間弱はかかったからな。」

がんばれよ・・・朴^{ぼくねんじん}念神」

三日後・・・

「一夏ー！機体届いたぞー！」

やや興奮気味の二ネットに呼び出され、俺は整備室へ向かう。

「見る、一夏！これが・・・超近接パワー型IS『カンタレラ』だ！！」

待ち受けていたのは、黒みがかった紫の機体。

上半身はごつごつとしたプレートアーマー状で、すべてつながっているのに対し、

下半身の装甲は、太もも部分はなく、膝から下は直線状になっており、真ん中を通るように噴出口のようなものがついている。

要は、PICで飛び続けなければ、ずっとつま先立ちをする羽目になる。

それもバレエのトゥーシューズのように爪先の先端が平たく作られているならまだしも、その先端まで噴出口がついている。

地上戦になれば地面に足を突き刺しながら戦えとも言っのだろうか？

まあ、ISの戦闘は基本空中戦だから問題ないと言われれば問題はないのだが・・・

「これで・・・後はソフトウェアと武器の開発だけでいいんだっけ？」

「ああ、それで武器なんだけどな・・・もう出来てる・・・ちょっと手伝ってくれ。」

機体の横に積まれていた大きな箱から、布にくるまれた何かを二人ががりでなんとか取り出す。

包んでいた布を取り出すと、巨大なチェーンソー型の剣と大鎌いわ

ゆるサイズが出てきた。

「・・・これを扱えと・・・？」

俺は汗をタラタラ流しながら苦笑い。

「・・・君ならできるよ。」

全く自分に責任はないとばかりに、二ネットは一夏の肩に手を置く。

「いやいやいやいや無理無理無理無理！そっちの剣（？）ならまだしも大鎌は絶対無理！」

「・・・『剣ならまだしも』？」

しまった！墓穴を掘った！

「い、いや・・・えっと・・・その・・・と、ところでさ・・・あの足の所についてる噴出口みたいなやつ何なんだ？さっきの大鎌の刃になる部分にもついてたけど・・・」

「ああ、小さいエネルギー刃を動かしてチェーンソーみたいにするんだよ。

見たいんだったら、ちょっと待っててくれ、ソフトウェアを作る必要がある。」

「ちょっと待っててくれって・・・」

実際、ISのソフトウェアを作るには何人ものプログラマーがプログラミングとデバッグを繰り返しながら行う。

どんなに少なく見積もっても3日はかかる作業、そのためにこうして大会まで準備期間があるのだ。

それを『ちよつと待ってくれ』で済ます二ネットの発言に一夏は首をかしげた。

「そついえば・・・のほほんさんとかの整備科志望の人たちは・・・？」

「ん？ああ、あいつらだったら『全員』第のチームに行つたよ。」

「そ、そんな馬鹿な・・・」

たつた一人でソフトウェアを作るなんて出来るわけがない。

しかし、二ネットはそんなことは全く気にもとめていない様で、平然とISの前に設置されたパソコンを操作する。

「おいおい、二ネット・・・ほんとに間に合うのか——！？」

二ネットが操作するパソコンの画面を見た瞬間、一夏は絶句する。いままで見たこともないような速度でISのコンパイル画面にプログラムが書きこまれているのだ。

いや、パソコンを操作しているというには語弊が生じる。

正確には、パソコンに繋がれたISに『触れている』ッ！

ISのソフトウェアのプログラミングを・・・操縦者を乗せての最終確認を除く全行程を・・・たつたの『15分』で彼は終了させた。

「一夏、ISに乗れ・・・今からアリーナに行つて、最終確認テストを行うッ・・・！」

創られし天才が手に入れた——究極の力

そう、もともとニネットオレに入力機器なんて必要ない。

ボイス・コントロール？アイ・コントロール？ボディー・ジェスチャー？空中投影型のキーボード？

馬鹿らしい・・・そんなことするぐらいなら、おとなしく大道芸でもやっていればいい。

あんなチマチマしたデバツクなんてする暇あつたら、その時間をもっと有意義にオレは使っね。

要は・・・頭の中で作り上げたデータをそのままISに転送すればいい話だろ？

まあ、たしかにそれは普通の人間には不可能だろうな。だから、キーボードをはじめとした入力機器がこの世にあるんだろうよ。えっ？普通の人間ってどういふのを指すのかって？

さてね、やろうと思えば誰でもできるんじゃないか？誰もやろうとしないだけで・・・

確かにオレは、ISこれの整備しか出来ないが・・・

——これだけだつたら誰よりも出来る！！！！！！

二章 第十三話 『創られし究極』（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

二章 第十四話 二本立て 『カンタレラ』 『シュークリーム』

第六アリーナ・・・

中央タワー上空から、『カンタレラ』を装備した一夏が真下を見る。約30機の実戦用ターゲットが待機状態のまま待ち構えている。

『一夏、聞こえるか？』

「大丈夫だ。ちゃんと聞こえる」

無線から二ネットの声が響く、当然彼はIS乗りではないのでプライベートチャンネルは使えない。

『何度も説明したからわかると思うが説明するぞ。大会の試合形式に合わせたから、カンタレラはタイマン戦特化だ。

なるべく囲まれないように、うまく鎌と剣を切り替える。もし、至近距離まで近付かれたんなら蹴っ飛ばせ。』

無線を聞きながら、大鎌を構えてすぐに切り替える練習をする。

正直、鎌を使うのは乗り気ではないが、大剣はもともと、予備の武装ということもあるし、何より重いので振り回すには向かなかったのだ。

改めて、『カンタレラ』の武装を確認する。

まず、メイン武器となる大鎌 モルテ 鎌の刃の部分からは小さなエネルギー刃がチェーンソーのように回ることによって敵を切断する。

次に、大剣・・・というよりは、まんまチェーンソーの デスト

レイジ　これは説明するところは特にないが、刃がエネルギー刃ではなく本物の刃である。

最後に・・・これは厳密には武器ではないのだが、脚部の装甲にもモルテ　と同じエネルギー刃のチェーンソーがついている。

と、まあこんな感じでこの『カンタレラ』すべての攻撃手段がチェーンソーによる切断だ。

もつとも、ISの戦闘はシールドバリアを削れば勝ちなのでこの戦い方が最もダメージ効率がいいのだ。

『準備はいいか？』

「いつでもどうぞ」

すると、今までディスプレイに浮かんでた『Ready?』の文字が『GO!』に切り替わる。

一夏が真下に向かって急降下を開始すると同時に実戦用ターゲットも一夏に向かって攻撃を開始する。

囲まれないようにというのを念頭に置きながら、ターゲットに突っ込む。

モルテ　を構えて、次々とターゲットを切り裂いていく。

次々と順調に撃破していくとこちらに向かって3体のターゲットがまとめて迫ってきた。

前に出てきた一体のターゲットを勢いに任せて蹴り飛ばして、すぐさま、モルテ　を使って引き寄せ、その直後、デストレイジ　に切り替えて頭から切断する。

後ろにまわったターゲットと、逃げ遅れたもう一体を、自分を軸に回転し、モルテでからめとる様に切り裂く。
その隙に近寄ってきた最後の一体に蹴りを入れて、デストレイジで地面に突き刺した。

『お疲れさん。何か不具合とか気になるところはあったか？』

無線越しに拍手の音が聞こえる。

「いいや、大丈夫。たぶんこのまま大会に持っていけると思う。」

『了解。今日はもう終了だ。寮に戻るぞ。』

ISを解除して、待機状態のまま二ネットに『カンタレラ』を渡す。
俺は軽く伸びをして、そのまま俺達は寮の自室に戻った。

大抵、安眠^{へいわ}というのは軽々しくぶっ壊されるというものである。
楯無襲来^{ほろひ}を回避しようにもまず不可能に近いし、二ネット^{いけにえ}を献上しようにも、あっさりトンスラをこかれてしまう。
しょうがないから、見て見ぬふりをして、逆セクハラをされれば
たまったものではない。

「・・・ねえ、一夏君。シュークリーム、一緒に食べない？」

「前みたいにマスタードが入ってたりとかしませんよね？」

「・・・ソ、ソナワケナイジャナイ。ジャウダンキツイナ

」

「・・・なんですかさっきの妙な間は・・・ま、いいですよ。いただきます」

そういうと、楯無さんはテーブルの上に置いた箱からシュークリームを2個取り出した。

皿を2枚用意した時に、俺はストップをかける。

どうしたの？と、いうふうに楯無さんが顔を上げる

「そのかわり、条件があります。どちらか一人がマスタードを食べるのも不公平なんで半分食べたら交換ということにしましょう。」

「別にいいわよ・・・え？い、今なんて？」

「だから、半分食べたら交換しようって・・・」

「えええ！？だ、だめでしょそれは・・・」

「どうしてですか？」

「い、いや・・・だって・・・それ・・・か、か・・・」

何か言葉を詰まらせながら楯無さんの顔が真っ赤になっていく。

「どうしました？」

「か、間接キスに・・・なっちゃうし・・・」

最後の方は耳をすまさない聞き取れないほどに声が小さくなっていた。

「・・・俺は別に構いませんよ?」

「ちょ、ちょ、ちょっと!それは・・・私に問題あるっていうか・・・えっと・・・」

耳まで真っ赤になった楯無さんを見て、ついに俺は笑い出した。

「って、冗談ですよ。さすがに俺も間接キスは気にしますって。」

「・・・へ?」

キョトンと、楯無さんが俺の顔を見る。

「だから、ただの冗談ですって。ちょっと楯無さんを驚かせてみようと思っただけで、別に他意はありません。」

「ひ、ひどーい!おねーさんをからかったの!?!?・・・こうなったら・・・!」

怒った楯無さんは、マスタード入りと思われるシュークリームを無理やり俺の口のなかに押し込ん——辛ッ!マスタードだけじゃない!これタバスコも入ってるよ!辛ッ!これほんとに辛い!と、言うか辛い通り越してえぐい!

・・・とまあ、最後に手痛いしっぺ返しを食らったものの、珍しい楯無さんを見ることが出来たのでよしとしよう。

「・・・ありがとう。『乙女心・ナンパ マニュアル』とヴィ

センテ先生。

——— そのころ、一夏の部屋のすぐ外

「・・・なあ、ヴィセンテ・・・」

「・・・どうした兄弟。」

「嫉妬と殺意だけで人って殺せるか・・・？」

「出来たらとつくにあいつは死んでんだろうが、チクショー・・・
あの朴念神め・・・！」

ねえねえ、今どんな気持ち？ねえねえ、今どんな気持ち？

二章 第十四話 二本立て 『カンタレラ』 『シュークリーム』 (後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

二章 第十五話 『オレがお前を守ってやる』

「・・・さあて、どうしたものか・・・」

ヴィセンテの目の前に佇む大会用IS『千本桜』

格闘戦を重視したスマートな機体ラインを彩る淡く力強いピンク色。6機の小型ウイングスラスターが背中についておりそれぞれ独自に動くことにより風の抵抗を最大限まで抑えた。

正直、もう少し時間がかかると思っていたが、簪や本音が思ったよりも優秀だったため、ソフトウェアの開発も順調に進んでいる。

「・・・（もつとも、今頃アイツはとつくに完成させてるんだろうけど）」

そう思いながらも、ヴィセンテは『千本桜』のコンソール画面を眺める。

「おい、簪ちゃん。こんな感じでどうだ？」

あらかた出来あがった制御ユニットのプログラムデータを簪に見せる。

「・・・駄目・・・です。これだと、出力は安定しますけど・・・少し無駄が多い気がします・・・」

「あー、そうかなー。二ネットにもよく言われるんだけどさー、やっぱり余裕を持たせないと多少不安が残るっていうか・・・」

「・・・逆に・・・ルツケーシ君のは・・・無駄を切り詰め過ぎ・・・あれだと、メンテナンスの頻度を多くする必要があるから・・・」

「なるほどね・・・（何度もメンテナンスが必要・・・か、あいっならではの芸当だな・・・）」

すると、制動システムの設定をしていた本音がやってきた・・・アルダを抱き枕のように抱えて。

「はなしで！私は抱き枕じゃないの！！！」

「えー、いいじゃん」

「うっう・・・うっ」

「あ、せんせー設定終わりました」

ヴィセンテと簪を見つけた本音がアルダを床に落とし（↑結構ひどい）、こっちに来た。

「ところでさ、簪ちゃん」

カタカタと、キーボードを叩く指を止めてヴィセンテは簪に話しかける。

「・・・なんですか？」

「今度の週末、デートにで——」

——ガッ！！！！

「FOOOOOO！！！！！！！！！！死ぬ！いくら俺でもボールは死ぬ！！！！」

「お嬢様！セクハラ教師を成敗しておきました」

「やれやれー！」 「うわー、せくはらだー！」 「簪ちゃんは夏君のものなんだよー！」

「ぼ……ぼうりよくはんたい……」

野次が飛ぶ中、ヴィセンテはお花畑^{おのよ}への日帰り旅行に出かけたのであった。

その晩、IS学園1年寮 屋上

「……………」

コツコツ、と誰かが屋上へつながらる階段を上る音が聞こえる。

後ろを振り返ると、ベアータが立っていた。
また、風が吹き、ベアータの黒髪がたなびく。

「……何か用か？」

——パンッ！

突然の平手打ち。叩かれた頬に自分の手を当てると熱を持っていた。

「・・・最低ですね・・・！転校初日から思ってたんですよ・・・アルダの様子がおかしいって・・・」

『アルダ』という単語でオレは理解した。

アルダの記憶を消したことは、後ろめたいという気持ちだけでベアータには伝えていなかったのだ。

「気になって・・・本部に聞いてみたらご覧の有様ですよ・・・」

「アルダⅡルツケーシの記憶はオレが独断で消した・・・ってことか。」

ベアータがオレを睨みつける。かみしめた唇にはうつすらと血がにじんでいた。

「・・・返してよ」

ぽつりと、ベアータの口から言葉がもれる

「お父さんを・・・パパを返してよ・・・」

ポツリポツリと、ベアータは言葉を紡ぐ。

雨も降っていないというのにベアータの足元には水滴が落ちた跡が出来ていた。

泣いていた。オレに対して、いつも無愛想で仏頂面をしていた彼女

が、確かに泣いていた。

「あんたらが悪いのに！あんたらが全部悪いのに！！アルダだけが守ってもらって、

私にはもう——守ってくれる人はどこにもいないのに！」

ベアータと目があった。

充血した眼に涙をためて、泣き崩れないように堪えているのがわかった。

再び俯いて、肩を震わして、弱々しく立っていた。

「——分かった。じゃあ、オレがお前を守ってやる。」

すると、ぽかんとした顔でこっちの顔を窺った。

「それってどういう・・・」

「そのまんまの意味だ。まあ、罪滅ぼしだと思ってくれ。本来はオレとアルダですべきなんだろうけど・・・今のアルダじゃ出来ないし、そうさせたのはオレだから・・・せめてオレだけでもってことで。」

ハア・・・と、ベアータが深いため息をつく

「呆れた・・・そんなことした程度で許されるとでも思ってるんですか？」

ベアータがいつもの仏頂面に戻る。やっぱり、彼女に泣きつ面は似合わない。

彼女は前を向いた。また、目があった。

「でも・・・言ったからにはしっかり守ってくださいね？もっとも、許す気はさらさらありませんけど！」

その日、月明かりに照らされながら、彼女は初めて俺に笑顔を見せてくれた。

さすがに寒さに耐えられず、オレとベアータは寮の中に戻った。彼女とオレの部屋は別々なので、階段の踊り場で別れようと思ったら、ベアータがオレの制服の袖を引っ張った。

「ん？どうした？」

「あら、守ってくれるんじゃないんですか？」

「いや、そうだけど・・・」

「だったら、私が万が一、不審者に襲われても大丈夫のように部屋まで護衛してください。口から嘘八千並べたわけでもないでしょう？」

「・・・ん？」

「嘘八百じゃないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・行きますよ。」

あ、逃げた。って、そっち逆方向だよ。織斑先生の部屋に行つてどうする。

「・・・わざとです。動揺したわけじゃありません。」

そうこうしているうちに、オレはベアータの部屋の前まで連れてこられた。

「で、どうすんの？部屋の中にまで入るのか？」

「ええ。今は私が一人で使ってますから。」

そう言いながら、彼女はドアノブに手をかけ、開けた。その瞬間、固まった。オレたちが。

なんかよくわかんないけど・・・『一夏×織斑先生』・・・何これ？

「あ・・・！ま、まって！ちょっと待って！！」

オレが開こうとした本を電光石火の動きで取り上げ、速さを保ったまま部屋に散乱していたマンガと原稿用紙を片づけた・・・というか、一か所に積んだ。

「・・・えっと、今のって・・・」

グイツと彼女がオレの顔を持って目の前まで迫る。

「忘れて。」

真剣だった。

「忘れて、お願い。」

あ．．．えつと．．．

「私はあくまで健全だから。決して日本のマンガとかアニメとかゲームとかに影響されてないから。」

いや．．．それは部屋中央に鎮座するゲーム機を片づけてから言おうか．．．

あと．．．なんか見覚えのある人物が抱き合ってる表紙の本は一体．．．？

それと、男同士で見つめ合ってる本とか．．

「違うの、読むのは好きだけど書くのはあくまでノーマルカプだけだから．．．って違う！私は何言ってるんだか．．．と、とにかくそうじゃなくて．．．えつと．．．」

「．．．所謂．．．腐女子ってやつ？」

「ぐッ．．．ぬぬぬ．．．うっうっう．．．」

「ま、まあ．．．今日見たことは忘れるから．．．」

「……………お願いします……………」

・・・その後、IS学園女王様ゲーム連盟（のほほんさん以下その他）に見つかり、翌日の日曜日、ベアータの部屋でゲーム大会が実施されたのはまた別の話。

「とりあえず、ベアータ」メツディー。これは没収だ。」

「……………はい。」

運が悪かったとしか言いようがない。

日曜日、ゲーム大会でみんながさわいできるときに、織斑先生がやってきたのだ。

その時、偶然見つかってしまったのが、『一夏×織斑先生』だった。

結局彼女は、大会当日。第一アリーナの清掃を命じられてしまった。

二章 第十五話 『オレがお前を守ってやる』 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

二章 第十六話 『死の舞踏』（前書き）

重要 この話を読む前にお願いがあります。

前話の最後のあたりにほんの少しですが追加で文章を入れたので

それをお読みください。そうしないと、おそらく話が分からなくなると思います。

（12月19日 23時以降に読まれた方は大丈夫です）

それでは本編をお楽しみください。

二章 第十六話 『死の舞踏』

大会当日

人であふれ返りそうなアリーナを中心、アナウンス担当の生徒がマイク片手に観客を盛り上げている。

今回は、整備班や将来そこに所属するであろう生徒が主に活躍したため、倉持技研などの取締役などが来ているのだ。

『さあ、IS製作大会…開会式が始まります！出場選手は各自製作したISを装備したうえで中心に集まってください！』

アナウンスを聞いて、控室で待っていた俺と二ネットは立ち上がる。

アリーナに隣接した一室に『カンタレラ』を待機させてあるので、俺はそこに向かった。

その隣の部屋に楯無さんの機体が、さらにその隣に 箒が乗る機体がある。

『カンタレラ』を装備し、箒たちよりも一足先にアリーナに出る。割れんばかりの大歓声とともに、スピーカーからISの紹介が聞こえた。

足を突き刺しながらの登場もカッコ悪いのでPICを使って、派手にアリーナを飛び回る。

実はこの大会、合計3回戦で1位〜3位を決めるのだが別枠としてISのデザイン性のアピールもあるのだ。

一通り一周すると、筈が乗る機体のアナウンスが流れる。

その機体と筈が待機している第二ゲートが開こうとした瞬間に――アリーナ天井から一閃のレーザーが楯無さんがいるはずのゲートを貫通した。

直後、開いた天井の穴を破る様に深緑色のISが現れる。騎士のような装甲、機体の周りを護衛するように回るビット……見間違えるはずもない、その機体は『ウィリディタース・アダム』だった。

響き渡る悲鳴と蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う観客。

だが、そんなことはお構いなしに『アダム』は楯無さんが待機していたゲートに手に持った槍を構え突撃する。

その時、壊されたゲートの奥から 蒼流旋 を装備した『ミステリアス・レイディ』が現れる。

「楯無さん！大丈夫ですか？」

「ええ、間一髪だったけど私は平気……でも大会用のは完全に壊されちゃった……それより、気を引き締めて。あのIS、尋常じゃないほど強いわよ……」

そう言つて、俺と楯無さんは『アダム』に向き直る。

『おい！一夏！更識先輩！応答してくれ！』

無線からノイズが混じりながらも二ネットの声が響く。

『こっちは大丈夫。そっちは？』

『いま、教員部隊が救出に向かつてる！なんとかして生き延び——！？』

無線越しに流れるサイレン。

学校中に設置されたスピーカーからひび割れた音で放送が流れる。

『無人機襲撃。教員部隊はこれを鎮圧せよ。繰り返す、無人機襲撃……』

なんてタイミングだ…

こんな化け物が来るときに無人機なんて…どうなってるんだッ！

「一夏ッ！大丈夫か！？」

すると、『紅椿』を装着した箒が第二ゲートから現れた。

「状況確認…敵機3体。状況Bに一致。戦闘行動を開始する。」

『アダム』の操縦者の声が聞こえる。

凜とした、大人の女性の声。

全員が『アダム』に視線を向けた時、8機の大型ビット オビディエンス が動き出した。

「もし、あのISが以前と同じ目的で襲撃してきたとしたら…狙いは大会用に作られたISのコアに違いはない！」

「一夏、今は逃げる！ここで私たちがなんとかして食い止める！」

「わ、わかった！」

俺は『カンタレラ』の背中のウイングスラスターを開き、『瞬間加速』を開始した…

モニタールームから織斑千冬は『アダム』と5機のゴーレム？を睨みつける。

（くっ…なんだってこんなタイミングで…）

今は何とか幕と楯無が持ちこたえているものの、それが崩れるのもおそらく時間の問題だった。

「織斑先生！僕たちにも出撃許可を！」

「…………駄目だ。危険すぎる。」

「でも！」

シャルロットたちがなんと祈願しても、千冬がそれを認めることはなかった。

しかし、そうしてるうちにもあの二人はどんどん追い詰められていった。

「あれ？そういえばメッディーさんはどこですか？」

「そういえば…」

セシリアの発言に、全員が周りを見渡す。

いなかった。

全員がざわつき始めた時、第一アリーナを映し出していたカメラに『ヴァンパータ』がうつっていた。

「……………！先生！反省文ならあとで何枚でも書きますっ！」

「…あつ！私も行きますわ！」

「俺もだ！」

「……………待て！」

千冬が、専用機持ちを止める。

「…織斑、更識、ルツケーシは『ウィリディタース・アダム』の鎮圧。その他は各自、臨機応変に無人機の鎮圧にあたれ。ただし、個別行動はとるな。いいな！」

「……………はい！」……………」

そうして、次々に専用機持ちがモニタールームを離れていった。

「……………」

そんな中、自分の無力を嘆くかのように、ニネットはただ呆然と立ち尽くした。

紅い機体が宙を舞うようにして、『ゴーレム?』の巨体を切りつける。

しかし、レスピラーレ 程度の攻撃力では無人機の頑丈さには歯が立たない。

エネルギー切れの心配こそないものの、結局自分の集中力との戦いになってしまう。

(…何か、打開策は…!?)

その時、アリーナの壁を突き破り、もう一機の『ゴーレム?』が現れてしまった。

「うそ…」

更に、もう一機。上空から接近する。

囲まれた…もう、逃げ道はどこにもなかった。

『ゴーレム?』2機が同時に超高密度圧縮熱線を放つ。

ぎりぎりでするもの、いつの間にか接近されてた3機目のブレードが、ベアータに迫る。

ブレードをレスピラーレでなでるように受け流すものの、次の瞬間には熱線が飛んできた。

すると、3機が同時に、3次元的な動きでベアータの周りを旋回する。

気がついた時には、『ヴァンパータ』の右腕の装甲は熱線を浴びて、

損壊していた。

（まずい…これは、ほんとにまずい…）

いくら、レスピラーレの効果で回復するとはいえ、機体の損傷はそれとは別問題だった。

早く援軍が来ないと、じわじわとなぶり殺しにされるのがオチだ。

その時、ベアータの視界の隅に、さっきまで自分と一緒にアリーナの清掃をしていた少女を見つけた。

彼女は自分と違い、専用機は持つておらず。なんとか見つからないように、逃げていた。

だが、ここでベアータが彼女を見つけてしまったこと災いだった。一機の『ゴーレム？』が彼女を認識してしまったのだ。

「……！だめえ！！」

『ゴーレム？』の左手から伸びた熱線に、ベアータは少女をかばうようにして貫かれた。

「……オレは……何をしているんだろうか……」

自分の弱さが憎い。ここだけの話、オレは一夏がうらやましい。

あいつは、何かを守るだけの力を手にしてる。

オレは……それを手助けすることだけしか出来ない。

ほんとに、神様がいたらぶん殴ってやりたいね。
不平等だろ、こんなん。

確かに、俺もあの能力には自信と誇りちからを持っている。
でも、だからどうした。あれでいざ、誰かを守れと言われて何がで
きる・・・？

オレみたいなやつは、おとなしくヒーローに任せて部屋の隅でガタ
ガタ震えてるって言うのか？
なさけない・・・情けなくて泣けてくる・・・

オレだって、大切な人ぐらい・・・守りたいんだ。

ほんとに・・・何やってんだか・・・

自嘲気味に、笑う。

「全アリーナ！ゲート強制封鎖されました！」

「…解除に何分かかる！？」

「20分です！」

「10分で終わらせろ！」

モニタールームに、ラウラから連絡が入る。

『第一アリーナゲート！現装備では破壊不可！至急、解錠願います。』

『

「今やっている！ボーデヴィツヒはデュノアを連れて第6アリーナへ迎え！」

『くっ……なんで…こんなことに…！』

悔しさに肩を震わせ、二人は飛び立った。

だが、その時、モニタールームのすべての画面が映らなくなった。

パニック状態に陥る、モニタールーム。

あわてた教員の一人が、積み重ねていた段ボールに躓いた。

転がり落ちた段ボールから、がらくたが溢れ出る。

いや、何個か見覚えのある物まで出てきた。

これは…以前の持ち物検査で回収された生徒たちの所有物だ。

段ボールを片づけようと、オレはがらくたを拾う。

何気なく、手を伸ばしたマリオネット。

そのとき…繋がった。

可能性は低くても…あった。オレが…ISを扱う方法が！

『コアやPICや制御ユニットをハッキングして…マリオネットのように動かす！』

体が先に動いていた。

一目散に、オレは『カンタレラ』のもとに急ぐ。

廊下を走り抜け、整備室の扉を開く。

——そこに、『黒みがかった紫』がいた。

ISは、織斑一夏を除き、女性にしか扱えない。

すなわち、男性には意味を持たない、ただのマネキン同様の代物。

だが、『カンタレラ^{こいつ}』はオレを待つてるように見えた。

この時が来るのを…待つていたかのように…待機状態の『カンタレラ』が座っていた。

コアに左手で触れた時、情報が一気に流れ込んできた。

オレの右脳が情報で満たされる。

左目に、カンタレラから見た映像が見える。

初めて見た…『IS』越しに見た『世界』を…

なぜか、すんなりと理解できた。

基本動作が、操縦方法が、性能が、特性が、装備が、稼働時間が、行動範囲が、センサー精度が、レーダーレベルが、アーマー残量が…

『カンタレラ』が動く

まさに、糸で操られた人形のように、動いた。

—— スキンバリアー
—— 皮膜装甲展開、… error
—— スラスター
—— 推進機起動、… error

頭の中で、エラー音が鳴り響く。

直後に走る激痛…まるで、左目をえぐられるかのような痛み

関係なかった。

エラー音がこだまする中、オレは『カンタレラ』に呼びかける。

『—— オレに…力を貸せ！カンタレラアア！！！！』

エラー音が止まる。

一瞬の沈黙、『カンタレラ』がその呼び声に呼応するかのように、立ち上がる。

—— 操縦者を判定、…不明
—— P I C、…設定不可能
—— I S コアに異常あり、…修正不可
—— I S コアに異常あり、…修正不可
—— I S コアに異常あり、…修正不可
—— I S コアに異常あり、…修正不可

『構わない…立て…！』

脳が、焼けるように痛い。

気を抜けば、たちまち意識を失うほどの激痛。

—— 遠隔操作用 特殊エネルギーバイパス、…構築完了

だが、動かせた。

『オレは IS^{こいつ}で 大切な人を守るんだ!!!』

『ゴーレム?』の左手がベアータに向けられる。

その左手の4つの砲口からチャージを始めたのビームが顔をのぞかせていた。

ベアータとヴァンパータには、避ける力も防ぐ力も残っていなかった。

——何が…『守ってやる』よ…

——ニネットの嘘つき…結局、助けてくれなかったじゃない…

——なんでこんなことになったんだろ…

——私が下手だったから…?あの子をかばったから?

——助けてよ…守ってよ…

——ニネットの…嘘つき…

すっと、彼女は目を閉じた。

もう、反撃の意思なんて彼女には残っていなかった。
そして、敵のチャージが終わった時——

——黒みがかった紫の機体が『ゴーレム?』の頭部を刎^はね飛ばした

「——え?」

その機体を持つは…巨大な大鎌
誰も乗っていない、IS

「な…んで…」

「おいおい…それ聞く?」

プライベートチャンネルから響く『ニネットの声』

カンタレラの構える大鎌が、もう一機のゴーレム?をカンタレラが
切り裂く。

大鎌を円を描くように回転させ、鎌の先を最後のゴーレム?に向け

「——お前を守りに来たんだよ!!!」

後ろを振り向くと、彼が…『ニネットⅡルツケーシ』が立っていた。

目から、つうつと涙がこぼれる。

来てくれた…!

ニネットが、来てくれた!

「立てるか？」

「…ええ！」

赤と紫、二つの影が同時に飛び出す。

互いに一定距離を保ちながら、徐々に敵との距離を縮めていく…とある、一瞬 大鎌と細身の剣が交差し――

――カンタレラ ヴァンパータ 猛毒と業火の ダンス・マカブル 死の舞踏 に『ゴーレム？』は4つに切り裂かれた。

「…大丈夫ですか？」

「…ここは、学校の医務室？」

「ちゃんと意識もあるみたいですね。心配しましたよ、あれが終わった直後、あなたがばったりと倒れこんだんですから。」

「…そうか、オレ……」

横を向くと、ベアータが椅子に座ってリンゴの皮をむいていた。
「…そのむき方で…食べれるところ残るのか？」

「…気合いでなんとか……」

おいおい…

「で、体の調子はどうですか？」

「弱音を吐くと、頭が焼けるように痛い…あっ！そういえばみんなは？どうなってる！？」

そう尋ねると、ベアータは真剣な顔つきになった。

「いま、みなさんが、ウィリディタース・アダムと戦っています。」

「そうか…じゃあ、お前は休んでろ。行ってくるから——っ！！」

体を起こした瞬間、再び強い頭痛が走った。

「いや、そのセリフはどちらかと言うと私の言葉ですから…でもまあ、『ヴァンパータ』もさっきの戦闘でしばらく修理に出すことになりますし。ここで見守りましょう。」

そう言って、ベアータは嬉しそうに足をぶらぶらさせている。

「勝負の行く末をか？」

「いいえ——勝利の瞬間を！」

二章 第十六話 『死の舞踏』（後書き）

次回！ 第二章最終決戦に突入！ラストの第3章まであと少しだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8218t/>

全ての道はローマに通ず

2011年12月19日23時52分発行